穢翼のユースティア　アンチェインドリームス

新見忍

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
　穢翼のユースティア　アンチェインドリームス

【Ｎコード】
　Ｎ１６０２Ｔ

【作者名】
　新見忍

【あらすじ】
　ＰＣゲーム、穢翼のユースティアのティアエンディングの後が気になって想像して書いてみました。基本的にゲームを全て見た人（おまけも含む）を想定しているので説明をだいぶ省いています。カイムとその周辺がその後をどう歩いていくのかを書くつもりです。はじめてこの『小説家になろう』で書いてみたので読みずらいかもしれません　。

下界の丘の向こう側

夢を見ていた、それは間違いない

「カイム、起きてるか！おい、カイム」

だが、思い出せない。
とても大切な、大事な何かを見たはず。

「エリス、合鍵あるだろ」
「捨てたわよ、もう私は誰のものでもないし・・
でも、カイムを困らせるには少し惜しかったかも・・」

「相変わらずよくわからん女だな」

そこでは大切な人が居て、平凡だが確かな幸せがあった。

「ったく、仕方ない。ドアを破るか、国王達を待たせて
交渉に変な風を入れるわけにもいかないしな・・」
「最初からそのつもりだったんでしょう」

「うるさい、親しき仲にもなんとやらだ」
「めんどくさい男・・・ちょっと離れてなさい」
「何をする気だ」
「目を覚ませてあげるのよ、イロイロとね」

それは俺が求めていて、もう手に入らないもの
そんなまどろみの中の俺を、

「おい、なんだその黒い粉は・・」
「時間が惜しいんでしょう」

「カイム！早く起きろ！おい！」

エリスは家のドアごと吹っ飛ばしたのだった。

※　※　※

お互い、多少気を使っていた節はある。

「おまえ・・自分の仕事を言ってみろ」

手荒い『目覚まし』を受けた俺は
ジーク、エリスと共に下層で馬車に揺られていた。

「自信過剰共の尻拭い」あさってを見て退屈そうに呟くエリス
「言い得て妙だな」やりとりを面白がるジーク
「違う、医者だ」忍耐力で耐える
「・・ああっ」
「何故、今気が付いたような顔をする」
「時々忘れるのよ、カイムの隣に居ると特にね」
悪戯っぽい笑みをこちらに向ける
昔と違って、トゲが無い分、受け答えに困る。
「茶化すな、俺は治すことが専門の人間が
何故に率先して人と家をまとめて壊すのかと聞いてるんだ」
「カイム知ってる？人間の体はね、
多少痛めつけていた方が回復力があがるのよ」
「そりゃあ初耳だ。どこで得た経験談だ？」
「知らないわ、今思いついたんだもの」
「おまえな～」
「まあまあ、お二人さん。これから大事な交渉なんだから
もちっと静かにたのむぜ」
「だったらエリスは関係ないだろう」
何でついて来たんだ、目線で言葉を送る。

「別に、退屈だったから」
それから目的地に着くまで、
牢獄にいた頃と変わらないやりとりが続いた。
お互い気を使っていたのだろう、
ティアのことは誰も聞かず、そして俺も何も話さなかった。

※　※　※

「ここは？」交渉場所について建物を見上げるジーク
「ルキウスの屋敷だ、ここなら反乱軍はやってこないだろうし
国王軍だって簡単に入ることはしない」
かって知ったる屋敷の敷地を進む。
「屋敷の主はどうしたんだ？」
ジークの質問は至極まっとうだった。
「死んだよ・・俺が殺した」
後ろを歩く2人からは、息を飲む声も立ち止まる気配も無い。
俺の中の葛藤はジークには不要な情報だろう

振り向かずそのまま屋敷の扉を押し開けた。

他の参加者は既に集まっているようだった。

「カイムさん、遅いではないですか」
聖女イレーヌの式服姿でコレットが向かえる。
その後ろでラヴィは無言でこちらに頭を下げた。

「悪い、少し寝過ごした」

「お疲れであれば、あまり無理をされない方が」
「たいした事無いわ、ここまで見てきたけど健康そのものよ」
ラヴィの気遣いに何故かエリスが返す。

咎める意味でエリスに顔を向けると薄く笑って返された。
ここで馴れ合っていても仕方ない。

「リシアは？」
「国王陛下は既に奥でお待ちです」
こちらの質問に間をおかずラヴィが返す。

「そうか」先に進むことで全員を促した。

会議用の部屋で、目を瞑り静かに座るリシアと
守るようにひかえるフィオネが居た。

物音に反応して目を開けるリシアと、先頭で入った俺の目が一瞬あった。
『待ちくたびれたぞ』と顔に出ていたがすぐに王のそれに戻る。

「じゃあ、各々忙しい身だし始めようか」
ジークが横柄に切り出した。

こうして国王軍と反乱軍の和睦交渉の準備会議がはじまった。

ノーヴァス・アイテルが下界に降りて数日、
戦闘は回避できたものの、混乱の収まらない反乱軍、国王軍の両陣営は
『どうして下界にいるのか？』
『あの終わりの夕焼（トラジェディア）けで何が起こったのか？』
『戦闘の後始末をどうつけるのか？』
様々疑問が浮かんでいた。

それぞれの陣営内でそれを処理することも可能だったが
その認識の齟齬が、新たな争いの火種になりかねないと判断し

主義主張は一旦棚上げして、
主導者達の共通認識のため、この場が設けられることとなった。

一触即発の状況で、ここまで場がこじれず進んだことは奇跡に等しい
あるいは、皆が心身ともに疲れていただけなのかもしれない。

「その前に、ひとつ断っておきたいんだが」
「なんだ、手短に頼むぞ」

俺の言葉に不機嫌な声でジークが応える。

「俺は牢獄にも国にも関わりすぎた。
こういう言い方は語弊があるが、双方から見て中立と思ってもらいたい」

「それって、一方に肩入れしないんじゃなくて
誰も責めずに悪者になりたくないだけじゃないの？」
エリスのするどい指摘だ。

「そうじゃない、俺は俺の目的があってここに居る」

「言葉ではいくらでも言えるが」

「俺を助けたティアに誓ってだ」
部屋の空気が引き締まる感じがした、重い沈黙が訪れる。

「勝手にしろ、国王様はどうだい？」
ジークは推し量るように俺を見ながらリシアに水を向ける。

「異論は無い」キッパリとした答えだった。

「ＯＫ、じゃあ、状況を整理しようか」
軽く手を叩いてジークが語りだした。

当時の戦場周辺は俺以外の全員が居たので、
むしろ俺への説明といった流れだった。
「・・・そうか、システィナが」

ルキウスが臨んだのか、システィナが進んで行ったのか
あの2人の関係がどうだったのか知る由も無い、が、
後悔はなかったのだろう、それだけはわかったような気がした。

「そこで改めて確認なんだが、国王さん？」
「なんだ」

ジークはリシアを睨みつける。

「あのときあんたは降伏した、そうだな？」

「ああ」

「国王軍の人間を助けるために、自分の身を差し出した」

「ああ」

「リシア、それでは！」
「よいのだカイム、
全ては国王たる我が身の不徳、どんな罰も受ける覚悟だ」

「しかし・・
ジーク、リシアをどうするつもりだ」

「さあ、どうするかね？俺はただ確認したかっただけだ。
陛下が、この場で首を飛ばされてもおかしくないという
ご自身の立場を理解しているかってね」

フィオネの殺気が膨れ上がるのを感じて、慌てて声を出す

「おいっ」

「わかってる、この場での話し合いの結果は、
お互いが信じる者の口からでなかれば意味が無い」

それまでは生かしておくさ、言葉は切ったが沈黙がそう伝えていた。

「さてと、じゃあカイム、そろそろ聞かせてもらおうか」

「・・・わかった」

視線が集まる、どちらかといえばこちらがメインだろう。

「あのとき、俺はティアを助けるために研究施設へ向かったんだ・・・」

そして、そこで起こった俺の知る全てを伝えた。

ティアがここに存在していたことを刻み付けるように

全てを話し終えて、全員を見渡す。

ここにきて一番長く重い沈黙が支配していた。

「彼女に、そんなことが・・」

裏の事情を全く聞かされていないフィオネの顔が蒼白になる、無理も無いことだ。

「馬鹿な子ね、ほんと」
言葉と裏腹にエリスの声は柔らかだった。
ある程度察していたのだろう、コレットとリシアは沈黙したままだ。
「っていうとアレか？
男一人を助けるついでに俺たちは生かされたのか？」
「天使様を貶めるような言い方は慎んでください」
ジークの茶化した言い方をコレットが咎める。
「しかしな・・聖女様、これでだいたい裏はとれたかい？」
「そのような言い方もおやめください」
澄ました顔のコレットにジークが畳み掛ける。
「コレット？まさかっ」
「はい、天使様のお声は私にも届いておりました」
聖殿でティアがラヴィを浄化したことを思い出した。
あのときもコレットは夢でティアを見ていた。
「そうか・・」
あそこでの出来事が、一瞬俺が見た幻であればいいと思った。
こうして認められるのは少し堪える。
「さてと、最後になるが
和睦交渉の方向性だけでも伝えておきたいんだが、国王陛下？」

「なんだ」

「事と次第によっては、俺たちは関所を封鎖する」

「！？」

「ジーク、何を言ってる？」

確かに反乱軍は関所から一部の下層までを掌握していたが

「腐っても国王のあんたならこの意味がわかるだろう？
俺たちはもうこの街にへばりつく必要は無い」

確かに下界には、ティアが草原へと浄化した大地がある。
そしてそこに降りるには今は関所を通り
ノーヴァス・アイテルの最下層たる牢獄しか無い。

「私を城に閉じ込め、飢え死にを望むか？」

「それも面白い。だが、今は人手が必要な時だ、
せいぜい協力してくれるのを願ってるぜ」

ジークの皮肉と恫喝でこの会議は終了となった。
窓から差す夕日が、リシアの表情を隠していた。

※　※　※

会議が終わり、それぞれが帰路につく中、
俺は天使の塔の最上階を目指していた。

「辛気臭い場所だな」
階段を上りながらジークが呟く。

「嫌なら来なければいいものを・・」
後ろからフィオネが声をもらす。

「あんただっていいのかい？国王さんの所にいなくて」
「ここは城だ、牢獄の主を野放しにはできない」

「俺はカイムの監視だ、国王陛下に要らん知恵を与えて
交渉が不利になってはかなわんし」

「俺はそんなことはしない」

「どうかね、土壇場でお前は何をするか読めないからな」

「それには同意する。牢獄のなんでも屋が
まさか国王陛下にお目通りしていたとは思わなかった」

「俺だってこんな事になるとは思わなかったよ」

夕日の赤い光が飛び込む。
最上階は相変わらず、空を大きく映していた。

「ここが・・」

「ああ、街の心臓だった場所だ」
立ち尽くすフィオネに改めて応えた。

瓦礫はそのままだが
ルキウスの亡骸も俺の流した血も見当たらない。

ルキウスの居た場所の検討を付けて振り返る。
「フィオネ、例のものを」
「うむ」

投げられたそれを受け取る。
折れ曲がった細身の剣、システィナのものだ。

「まさに鬼神だった、一歩間違えれば私もここには居なかったろう」
誰ともなく呟くフィオネ

俺は瓦礫の隙間に剣を突き立てた。
「ジーク、火酒・・あるか？」

「ああ、不思議とな」
ここまで、手ぶらだったはずだが
どこからともなく取り出した酒瓶をほおる

「高いぞ。まあ奴らには借りが無いわけでもないからな」
「悪いな」

風錆との一件のことだろう、なんだかんだで義理堅い男だ。
酒瓶を剣に向けて傾ける。

「牢獄の酒で悪いが」２人で飲んでくれ。
生き残っていればリシアのために尽力してくれたかもしれない。
だが、それは生きているものの務めだ。
己を信じ、その生まれた意味をまっとうした彼ら、今は２人の休息を願おう。

しばらくして無言のまま階段に向かう。
「つくづく女に甘い奴だな、お前は」
「『雨の日の友』だからな」
本人は嫌がるだろうが、個人的に弔いをするぐらいの権利はあるだろう。

「なんだ、それは？」
「いや、何でもない」
不思議そうな顔をするフィオネを通り過ぎて、元来た道を引き返した。

※　※　※

これが夢だというのはすぐに気が付いた。
そして、以前見たことがある夢だということも

広大な畑、小さな家、そしてそこでは
「おかえりなさい、カイムさん」
ティアが迎えてくれる。
「ああ、今戻った」
テーブルには既に夕食が用意されていた。
「屋根の修理ご苦労様でした。ご飯にしましょう」
「そうだな、そうしよう」
昨日と同じようにワインを開けた。

「今日は卵を割りませんでしたよ」
「そうか、えらいな」
「はい、私だってやるときはやります」
「そういえば、捌いたウサギはどうした？」
「ああっ！？」たまたま、帰りがけに干してあったのを見かけたのだ。
「食事のあとでいいから、取り込んでおけよ」
「はい～」小さくなって応える。
「気にするな、ティアらしくて助かる」
「何が助かるんですか」ふくれている。

「俺がおまえの扱いを変えずにすむってことだ」
言いながらティアを抱き上げる。

「わ、わ、何をするんですか」胸の中でティアが慌てている。

「おまえの機嫌をとろうとしているんだが」
さも当然といった顔でわざとらしく応える。

「干したウサギを取り込んでません・・」

「気にするな」これは夢なのだから。

「そういって・・
ご自分が求めているだけではないですか」

「正解だ、こういうのは嫌か？」

「う～断れないと知りながら・・
私が困る顔がそんなに見たいですか・・」

「安心しろ、その分やさしくしてやる」

「は、はい」俺の好きな笑顔がそこにあった。

これが夢だということは気が付いていた。
だから、ティアにうんと優しくしてやろうと思った。

聖女奔走1

夢を見ていた。なんだか前にも同じことがあった気がする。

「おい、カイム寝てるのか、最近寝坊が多いなあいつ」
「構いません、早く引きずり出してください」
「ちょっとコレット、カイム様に失礼でしょう」

「止めないでラヴィ、カイムさんには
言っておかなければならないことがあります」
「何怒ってるんだ、聖女様は？」
「さあ、起きてからずっとこの調子なのです・・」

やはり思い出せない、とても安らかな夢だった。
もう少しこの幸福を味わっていたい。

「まあいいか、エリスのおかげで入りやすくなったしな」
「ジーク様よろしいのですか？」
「なあに、これだけ騒がしているのに起きない方が悪い、
この程度の警戒ができないようじゃ牢獄は生き残れない」

「つべこべ言わずに、はやくお願いします」
「あいよ、悪く思うなよカイム」

「ジーク様・・・もしかして楽しんでませんか？」

「わかる？最近張り詰めっぱなしだかさ、
後腐れなく遊べる奴は貴重なんだよ。あ、これはカイムには内緒な」

「はあ・・」

こうして、コレットとラヴィに醜態をさらしながら
俺は叩き起こされたのだった。

※　　※　　※

「俺が、ティアの夢を見ているだって？」
牢獄の通りを俺とジーク、コレットとラヴィが連れだって歩く。
「覚えが無いのか？ついさっきまであっち側だったんだろ？」
「そんなこと言われてもな・・・」全く覚えが無い。
それでなくても、派手な起され方で記憶なんて吹っ飛んでるだろう。
「お話できないだけではないですか」コレットは大股で先頭を歩く。

「な、コレットはさっきから何に怒ってるんだ」
「さあ、起きてからずっとこの調子です」
ラヴィも不思議そうに首を傾げる。

「聞こえていますよラヴィ
　カイムさんもジークさんと同じ事を言わないでくださいまし」
完全に言いがかりだった、本気で怒っているらしい・・。

「コレット、よかったら
　その夢で俺が何をしていたか教えてくれないか？」

「っ！？」
コレットが歩みを止めてこちらに向き直る、心なしか顔が赤い。
そのまま口付けでもされるかと思うほど顔を寄せてきた。
そして、いくら牢獄でも朝っぱらにふさわしくない内容を叫んだのだった。

「～～～っ！？」
ラヴィはコレット同じく顔を赤くして下を見ている。
叫んだコレットはそれ以上だ。
ジークはといえば、壁に片手をつき、声が出せなくらい腹を抱えて笑っていた。

「俺は何をやってるんだ・・」

「ナニをやってたんだろ、
いいじゃねえか好きな女なんだ、どこでナニをしようが」
ジークは自分の言葉が可笑しかったらしく、また声を殺して笑いだした。

「とにかく、カイムさんは少し慎みをもっていただかないと」
いつまでもこうしているわけにもいかず、
取り繕うように咳払いをするコレット、だがまだ顔が赤い。

「しかしなぁ・・夢の中のことだろう、俺にはどうしようもない」

「カイムさんは少し勘違いをしています。いいですか？
今までも数回、天使様の姿を私は夢でみましたが
それらは全て現実にあったことです」

「ああ、確かに」
曖昧な表現も多かったが、ラヴィの浄化や麻薬を処分していたときのティアの様子等
現実に起こっていた事を見ていたのは間違いない。

「ですから、カイムさんが見たであろう夢は
天使様が実際に会いにきていたということです」

「本当なのか？」
「私は嘘は言いません」
自信たっぷりのコレットだったがにわかに信じがたい。

「たんにコイツが欲求不満なだけじゃないか？」
「ジーク、それ以上言うと怒るぞ」

「んじゃ、実際に試してみるか、ああ、心配するな
コイツのことは友人として俺が一番よくわかってる。
2人は先に行っていてくれ、責任もって送り届けるからよ」
俺の肩を抱いて来た道を引き返す。

「おいっ」
「あのままじゃ気まずいだろ、悪いようにはしねえよ」
そう言って肩を抱いたままリリウムの戸をくぐる。
「お～い、誰かいないか！」
「あれ～カイムじゃないめっずらしい」
ほどなく、リサが顔を出した。
「なんだおまえだけか、他は？」
「アイリスはもう寝てる、クロ姉はそろそろ戻ってくると思うよ」
「じゃあ、おまえでいいや
金は出す、ちょっとカイムをよくしてやってくれ」
「ほんと♪」
「おいっ」
歓声と非難が同時におこる。
「お前ちょっと疲れてるんだ、好きなだけ遊んでこい
変な夢なんてすぐに見なくなる」

「俺は別に・・」
「聖女様にああキリキリされてると、今後の交渉にも差し支える」
急に真面目な顔で語りだす、どうやらこれが本音らしい。

「それとも、リサじゃ不満か？」
「そういうことじゃなくてだな」

「では、わたくしがお相手するというのはどうです？」
いつの間にか、開いている腕がクローディアに絡めとられていた。

「クロ！？いつのまに・・」
「カイム様が油断なさっているとは、珍しいこともあるのですね」
絡めた腕に、そっと自分の胸を押し付けてくる。

「今帰りか、今日は確か下層の有力者の所だったか」
「はい、上層の方とは縁が切れてしまいましたから」
どうやら、街を二分した影響はこんなところにも出ているようだ。

「だから少しでも、機会を逃さぬようにしております」
「ジークの金じゃ、儲けにはならんだろう」

「いいえ、『牢獄のカイムも贔屓にする女』ともなれば箔がつきます」
「俺を宣伝に使うな」

「それでしたら、個人的にお慕いしているというのは・・」
「なお、悪い」娼婦がそんなことを言ってどうする、
まあ、ジークの前だし全て冗談なのだろうが・・。

「いくぞジーク、遊びはここまでだ、時間はそんなにないだろう」

これでアイリスが出てきて『不能野郎』と言われた日にはいよいよ引っ込みがつかなくなりそうだ。

「仕方ない、わりと本気だったんだが」
そう言うジークの目は笑っていた。

「カイム様、お心変わりがあればいつでもお相手しますわ」
「カイム、私もいつでも待ってるからね」
クロとリサに見送られてリリウムを後にした。

※　※　※

「なあ、本当に覚えが無いのかおまえ？」
牢獄の関所前に来たとき不意にジークがもらす。

「くどいぞ、隠しておく必要が無いし、それに・・」

「なんだ？」
「俺は、あいつが居ない現実をどう生きていいかわからないんだ」

程度の差こそあれ、都市全体があたらしい可能性に向けて動いてるのに
自分だけが取り残されているような、そんな気がする。
そこでこんな話を聞かされて、混乱しない方がどうかしている。

「さっさと新しい女でも見つけろ」

「簡単に言うな」
「簡単なことさ、お前が迷わない理由さえ整えば何の問題も無い
よし仕事をくれてやる、そんなことに頭を使うぐらいなら体を動かせ」
「何をさせる気だ？」
「何だと思う？」質問を質問で返された。
「国王の暗殺でないことは確かだ」
「言うじゃないか、できもしないことを」
「それは、物理的にかそれとも心理的にか？」
今の俺がジークにどう見えているのか少し気になった。
「前提として昨日のお前の『中立』という発言は信じているが
それが必要と判断しても、今のお前はたぶんあの女隊長とどっこいだろう」
くやしいが正確な分析だと思った。
今の俺の状態ではフィオネを抑えるのがやっとだろう
「フィオネか、リシアの側に居るようになって見違えたな」
「どうも気が合うらしいな、ここに居た頃より数段やりづらい
昨日もそれとなく見ていたが、こちらが警戒していたのがバレバレだったな」
「そうか」素直に嬉しく思う。
フィオネの成長もそうだが、今のリシアには頼れる人間が少ない。
「お前だって、そうとうやりづらくなったがな」

ジークが改まって俺を見た。

「こんな、娼婦に後ろを取られる元殺し屋がか？」

両手をあげおどけてみせる。

「ああ、なんていうのかな。

余裕とも違う、力の入れ所がわかっている感じだ」

「なんだそれ？」

「このさき面白くなりそうだってことだよ」

軽い足取りで牢獄の王は、自分の領地から交渉の場へ足を進めた。

聖女奔走１（後書き）

私事ですが、風邪を引いたのでとりあえずできているところまで・・・

・

予定ではあと３～４回くらいで、５月中にはまとめるつもりです。

聖女奔走2

和睦交渉が始まった。
上層の空いた屋敷にそれぞれの陣営の指導者が集まる。

お互い今の状況は協力するべきと理解しているが
数日前まで殺し合いをしていた人間同士
『全てを水に流して』というわけにはいかない。

そこでまず、この事件に一つの結論を出した。

『全てはこの都市を救おうとするあまり
手段を選ばぬ暴走をしたルキウスにある』

反乱軍にしてみれば、王の降伏という無条件に暴利を取れる形を得たが
これ以上のものを臨むと、個別にエゴを優先し内部分裂をしかねない。
この反乱は自分達の『生』を勝ち取るためであって、そもそも国を滅ぼすことではない。

王国軍の貴族側は自分達が生き残れるのならばと
争いの中で死んでいった者に、その責を負わせることになんのためらいも無かった。

ただ、国がルキウスを抑えることができなかった責任として
今後の国政は議会主導として、国王は国の象徴としてのみ存在し最

高権限を剥奪
議会の人員の割合は国王軍からは４割、反乱軍からは４割
そして残り２割は・・

「ひとつ、よろしいでしょうか？」

一段落したところでコレットが進み出た。

「天使様の奇跡により、大地に降り立つことができたこのとき
わたくしは聖女イレーヌの名において『天使教会』の教えを宣言します」

場内が多少ざわめくが主に貴族達だけだ。

「『聖イレーヌ教会』であれば先の争いで主だったものは命を落としている、
その復興ということでよいのか、聖女よ」
リシアは言葉を選びながらコレットを伺う。

「王よ、わたくしが崇めるのは、この奇跡を起こされた天使様お一人です。
『聖イレーヌ教会』という国が民からの隠れ蓑にするために
利用した集まりではありません」

ギリッとリシアの歯を噛む音が聞こえそうな気がした。

「私は既に権限を剥奪された身だ。
その王の言葉でよいのなら新たな教え『天使教会』を認めよう」

誰も発言する者はおらず、無言の肯定が場を包んだ。

それらのやり取りを、俺は反乱軍の末席で聞き流していた。
牢獄出身というだけで、とりあえず与えられた場所だ誰も気にはしない。

その後も先日のジークの恫喝をよそに、
決められていく内容は比較的まともなものだった。

個人的には、ルキウスの扱いについて細かな反論はいくらでもできた。
だが、『国が新たなまとまりを得るための礎になるのならば』と
もし彼がこの場に居れば喜んで受けたのではないか、
自分に都合の良い思い込みかもしれないが、そんな気がする。

しかし、これはイレーヌという名前の役目が、
ルキウスにとって変わっただけだということは
ここに居る人間のほとんどは理解していることだろう。

それでも進まなければならない、
ティアに救われたにもかかわらず、度し難い人の世といった所だ。

ただ、イレーヌに戻り己の真実を伝えようとするコレットや
力をそがれてなお、王の立場から行く末を見守るリシア
牢獄の安定のために上り詰めるジーク達の行いを
俺は常に見定め助けることができればと、なんとはなしに考えていた。

※　※　※

「『都市外縁調査隊』ねえ」
自宅に戻った俺に、フィオネが
大仰に書かれた謳い文句が踊る紙を突きつけてきた。

「そうだ、国王と聖女と元反乱軍指導者の推薦だ文句はあるまい？」
議会運営が決まり、
堅苦しい場に出る必要が無くなったと思ったらこれだ。

「はねっ返りと石頭と変態紳士の間違いじゃないのか？」
「なんだそのなんとか紳士とやらは？」
酒の勢いのたわ言だ、本気にされても困る。

「聞くな話が長くなる。
で、ようは大地を調べる人間が欲しいってことだろ」

「ああ、おまえ自身興味があるんじゃないのか？」
他でもない、ティアが浄化した場所だ。

「興味が無いわけじゃないが、
そんなの専門の人間がいくらでもいるだろう？」
だからといって『はいそうですか』と出向くのも癪にさわる、
我ながら面倒な性格だと思う。

「どちらかといえば、外への警戒というより
調査する人間の警護になるのだが・・」

「なんだそれは？」
フィオネの口からこう出る以上、警護する人間の選択肢はほぼ一択だが。

「私からはこれ以上は言えない、
ぶしつけな頼みだというのは重々承知しているが、どうだろうか？」
相変わらずの誠実さだ、それがフィオネの長所ではある。

「どうせ暇なんでしょう、言ってくれればいいじゃない」
いつのまにか戸口にエリスがもたれ掛かっていた。

「人の家に無断で入る奴があるか」
「立付け悪いわよ、引越しした方がいいんじゃない」
言いながら扉を叩く、確かにベコベコと変な音がするだけでノックの意味が無い。

「誰のせいだと思ってるんだ」
「最近、緩みっぱなしの何でも屋さんだってことは確かね」
気が付かない方が悪いと言いたいらしい。

「すまないが、私の頼みを促してくれるのか
邪魔をしにきたのか・・」

「両方よ、文句ある？」フィオネが言い終わらないうちに被せて睨む。
この頃、昔を思い出したように俺に絡んでくる。

これも半分は遊びなのだろう。

「わかったから、その扉の修理代を出せ
で、無いなら帰れ」
こじれると面倒なので今日はお引取り願おう。

「無いわよ、全部使っちゃったから
だから、稼ぐわ私もそれに参加する」

「本当か！？」

「ちょっとまて、なんで『私も』なんだ」

「あら、こんな美人を下界の大地に置き去りにするの？」
「言ってろ、おれはまだ行くとは言ってない」

「意固地になっちゃって、
たんに一人酒が嫌だから、こうしてのらくらしてるだけじゃない」

半分は当りだった、狭い家だったはずが最近妙に広く感じる。
その理由は明白だが、認めずに深酒して寝過ごしている。

「出立は明朝、集合はリリウムの1階だ」
「おい、おれはまだ」
そう言って席を立つフィオネの背に空しい抵抗をする。

「今日は早く寝るのよ、医者が不摂生を見過ごすわけにもいかないから」
そう言って俺の残りの火酒をあおると、用件は済んだとばかり戸口へ消えた。

壊れかけの扉が、半開きのまま風にゆられて奇妙な音を立てていた。

聖女奔走２（後書き）

まだ風邪っぴきです。
自分の中で前回とあわせて一回分なので少し短めですが・・・

５／１５　文章訂正

夢に咲く向日葵

風が草原を駆け抜ける。
小さな家、一面の麦畑、全て見慣れた風景だ。
そしてこれが夢だということに気が付き、
更に、現実の記憶もある程度は思い出せた、だから

「おかえりなさい、カイムさん」
「ああ、今戻った」

小屋の中で待つティアとの挨拶もどこか違和感を感じた。

「お食事できてますよ、座ってください」

いつかと同じように席に着く、
このまま平凡で当たり障りの無い、
だが、貴重な時間を過ごすのも悪くない。

「おまえ、ティアだろう？」
それでも、俺は確かめずにはいられなかった。

「何を言ってるんです、カイムさん？」
こちらに不思議なものを見る目を向ける。

「隠さなくてもいいんだぞ？」

「何を隠すんですか？変なカイムさんですね」
まあいい、方法ならいくらでもあるのだ。
「聖女様がな、夢をみたそうだ」
「はあ？」
少しやり方を変えてみよう。
「その夢では俺がティアに、
ベッドでそれはそれは優しくしていたそうな」
「・・・・はい？」
昔話を聞かせるように語りかける。
「聖女は、これは天使様のお告げとたいそう喜んで
そのままお話になったそうだ」
「え、え、嘘ですよね・・」
「いや、ほんとだ」
コレットが夢のことを俺達に話したわけだし、これは嘘ではない。
まあ、怒られながらだが・・。
「そういう事で、だ」
言いながら手を取る、ティアは目を白黒させている。
「ティア、突然だが抱かせてくれ」
これだけ聞くと変態だな俺。
「や、えっと、あの・・嬉しいけどダメです」

「なぜ？」
これが本当に俺だけがみる夢なら、拒まれる理由が無い。
「え、え～と、え～と」汗をかきながら明後日を見る。
これではこっちが悪い事をしているようだ。

「俺のことが嫌いか？」

「うう、そんな事は無いです。
無いですけど・・・・・ふえ～ん、ごめんなさい～」
泣き出してしまった、完全にやりすぎだ。

「ああ悪い、悪い、悪かった。頼むから泣き止んでくれ」
ティアの頭に手を添える。

「カイムさんはひどいです～」
「ああ、そうだな、俺は悪い人だ」
胸の中で泣きじゃくる。

「人をイジメて楽しんでる悪い人です～」
「ああ、本当にどうしようもない奴だ」
好きな女を無駄に泣かせているわけだし、弁解の余地も無い。

「でも・・・でも、大好きなんです～」
「はは、おまえって奴は・・」
泣きながら言うことじゃないだろうに・・。

泣き止むまで待ってそっと声をかける。
「なあ？」
「なんですか」
声が少し強張っている、
俺は安心させるように軽く頭を撫でた。

「おかえり、ティア」
「あ・・・はい、ただいまです。カイムさん」
俺の好きな笑顔がそこにあった。

※　※　※

やっと落ち着いたティアと再びテーブルを囲む。
「すいません、騙すような事をしてしまって」
「いいさ、いろいろあるんだろ」
せっかくなので用意されていた食事も済ませて、
出してもらった茶をすする。
「さて、どうして俺に会いにこれたんだ？」
何から聞くか迷ったが、とりあえずこれからだ。

まあ、人を生き返らせるだの、大地を浄化するだのやってのけた奴だ。
いまさら人の夢に出るくらいは簡単な気がするが。

「え～と、私もよくわからないですが
　きっと神様が、会いたいというお願いを少し叶えてくれたんですよ」

要領を得ないが、本人もよくわかっていないのようだ。

「少しねえ」
「はい、そんなに長くはいられません。
　ずっとこのままでは幸せで罰が当たります」
誰もそんなことは思わないだろうに、欲の無い奴だ。

「そうか、これからこうして会える
　ならそれも悪くないと思ったんだが」
「はい・・・幸せは長くは続かないんですよ、カイムさん」
どこか悟ったような顔をして告げる、
だが、その真剣さを真に受けたくはなかった。

「知ったふうなことを言うな」指先でティアのおでこを小突く。
「あう、茶化さないでください～」
なんとなく、ばつが悪くなり話題を変えることにした。

「それよりなぜ俺は現実で覚えていないんだ」

そう、ここでこうしているときは今までの夢も
現実であったこともわかるというのに
目が覚めると俺は何も覚えていない、それは今はっきりとわかる。

「うう、そのことですか・・」
「どうした？怒らないから言ってみろ」
「・・笑いませんか？」
「笑わない」
「本当に笑いません？」
「ああ、笑わない」
「言いながら、今笑ってません？」
「おまえの必死さが既に可笑しいんだ」
浄化してから、少し性格変わってないかコイツ？

それからしばらく沈黙の後、ボソボソと口を開いた。

「・・・・かしいからです」
「ん、よく聞こえなかったぞ」
「恥ずかしかったからです！」
「・・何が？」
「だから・・カ、カイムさんに・・その、だ、抱いていただくのが」
「つまり、俺にここで抱かれたのが恥ずかしくて忘れさせていると？」
「・・・・はい」赤面しながら頷く。
なんというか、才能の無駄使いも甚だしい。

「ぷ、く・・はははは」
「あ～あ～、笑わないって言ったじゃないですか～」
これを笑わずにいられるか。

「天使になってもティアは変わらないな」
「なんですかもう」完全に膨れてしまった。

「ますます気に入ったってことだよ」
「・・・・！？
そ、そんなこと言っても、また、忘れさせちゃいます」

「構わないさ、あっちはあっちでなるようになる」
正直なところ、現実ではきっとこの幸せの記憶に耐えられないだろう。
ならばここはこのままでいい。
俺とティアとそれだけで・・・。

※　　※　　※

さすがに毎回寝過ごすわけにもいかず。
日差しが部屋に入る頃、適当に起きだしてぶらぶらと牢獄を歩く。
寝覚めは悪くない、散々おもちゃにされた夢のことは相変わらず全く記憶に無い。

どうせ何かあれば、コレットが言ってくるだろう。時間はまだある、はずだ。
子供の密会でもあるまいし、嬉々として出向くのも気が引ける。

フィオネはもうリリウムに居るだろうが
俺は行くとは言ってない。少しくらい待たせても知ったことではない。
まあ、どう理由をつけても俺がガキっぽいだけなのだが・・・。

気がつくと、ヴィノレタがあった場所まで来ていた。
崩落で何も無くなっていたはずが
浄化の作用か下界に着いた時の偶然か、無いは無いでも今はただの更地になっている。

その一角に足を踏み入れる。

忘れていたわけではない、忘れられるわけも無い。
だが、ティアを助けるために死に物狂いだった俺は
そのとき確かにメルトを忘れていた。

これからも不意に思い出すことはあるだろし、
メルトだって、辛気臭い感傷のだしにされるのはきっと嫌うだろう。

だが、俺は同じようにティアを忘れてしまうのではないか思うと
その場から歩き出すことができない。

ティアは俺の側にずっといるのだろう
だが俺はきっと忘れる、忘れて他の女を抱いて知らぬ間に幸せになるのだ。

そうなる俺を今の俺は許せない。
延々と渦巻く黒い思考をどうにか振り切って、早足でリリウムへ向かった。

※　※　※

「おう、カイムではないか、遅かったな」
世界は往々にして人の都合を考えちゃいないが、
人が感傷に浸っていたのだからもう少し冷却期間が欲しい。

「お前、誰だ？」
リリウムの１階には見知らぬ女が居た。

＞ｉ２４１７９―３１６８＜

「なにを、私の顔を見忘れたか」
正確には『見知らぬ女にしておきたい奴』が居た。
やはり護衛の対象は国王陛下のようだ。

「ああ、リシアによく似た娼婦が
朝からチェスをしていると全力で思い込んでいるところだ」

「失礼な男だ、私は彼女らほど苛烈で力強くは無い
何の力も無い名ばかりの王だ」

いつだか、牢獄を見せたときの、曰く『一番地味な服』に身を包んだリシアだ。
ただいつもの髪型では無く、髪を下ろしている。

それだけで印象がだいぶ変わるのだから
女というのは相変わらず不思議な生き物だと思う。

「なんだ、殊勝な態度だな」
チェス番の向かいには黒猫の人形が転がっていた。
先ほどまでアイリスと打っていたのだろう。

「フィオネはどうした？一緒だったんだろ？」
「ああ、上だ直に戻る」
「そうか」

言っている間に階段からフィオネが姿を見せた。
「遅かったな、別の者を手配しようか考えていたところだぞ」

「俺はそこまで薄情じゃない」
「そのわりには、あまり乗り気では無いようだがな」

「これは生まれつきだ、それよりフィオネ
もっとリシアの格好はなんとかならなかったのか？
街娘が花摘みにいくんじゃないんだぞ」

「そうだぞ、だからあれほどメイド服にしようと言ったのだ」

「真面目な話をしてるんだ、おまえは少し黙ってろ」
「私だって真剣だ」

「なおさら悪いわ」

「陛下、これから向かう下界は大変危険です
ここはカイムの意見をなるべくお聞き入れください」

「うむ、少し遊びが過ぎたか」
「しかしなあ、本当に行くのか？」

「無論だ」
「何故？」

「おまえは自分の言葉を忘れたか？
『自分の目で見て、考えろ』そう言ったであろう」
「ああ、そういえば言ったかな」
もちろん覚えている。

「だから、新たなノーヴァス・アイテルを私は自身の目で見るのだ
それは私の・・・いや
今後、この国の王として名を連ねていくものに必要なことだ」

それを語るリシアの目は本物だった。
いつか、自分の代で成せなくても必ず王が必要になる。
それを信じ、今何が出来るのか模索しているのだろう。
「そこまで考えているのなら、まあいいだろう」

「うむ、わかればいい」
「だが、俺の言うことは聞け
生きてノーヴァス・アイテルに戻りたければな」

「わかっておる、もうヴァリアスのように大切な者を失うことも、
残した者に、失われた悲しみを与えるのも御免だ」

「そうだな」身につまされる話だ。

「カイム、エリス殿はどうした？一緒に来るものだと思っていたが」
話の成り行きを見計らってか、フィオネが切り出した。

「なんだそっちと一緒だと思ってたぞ」
いつもの気まぐれか、まあいても助かる以上に
厄介事が増えるだけなのだから気にしないが。

「仕方ない、我々だけで出発しよう
カイム、改めて言うが今回のことは・・」

「秘密裏に行われているってんだろ、わかってる」
部屋の隅に置いてあった、荷物を担ぐ。
数日分の食料と野営用道具一式はさすがに少し重かった。

リリウムの裏口から、なるべく通りに出ずにスラムへ
その端に、新たな大地への細く急な道が続いている。

「リシア、疲れても担いだりしないからな」
「おまえに体を預けるくらいなら、
縄に巻かれて引きずられる方がましだ」
「それはいい、拘束する時に使う特性の縄がある
疲れたらいつでも言ってくれ」
長い時間歩いてきので様子を伺ってみたが、
それなりに体力はあるらしい。

「カイム、あまり無駄口をたたくな先は長いのだぞ」
「はいよ」

道は崖にそって何度も折れながら少しづつ下っている
一人がやっと通れるくらいの道幅だ。

ジークは下界への進出は当然といった態度だったが
交通の整備だけでもかなりの手間がかかるだろう。
だが、浮かんでいた時に比べて天使の加護が無い今
確実に都市内での食料の生産量は落ちる。
崩落直前ほどではないが、あきらかに井戸の水量は下がり始めている。
ノーヴァス・アイテルは、
早急に下界を踏まえた営みを形成しなければならい。
もちろん、俺達以外にもそれなりの数が下界に降りて調査を始めている。
だからといって悠長に事を構えている時ではないのだが・・・

「あら、遅かったじゃない」
やっと大地に着いたのもつかの間
汗だくの俺達を、エリスが涼しい顔でむかえる。

「なんでお前がここに居る？」
「わたしも行くって言ったでしょ」

「新手の冗談かと思った」
「私、冗談は嫌いなの」
「『他人の吐く冗談』がだろ？」
「よくわかってるじゃない」

「2人とも喧嘩は止めてくれないか」

見かねてフィオネが割ってはいるが、
ここで先に折れるわけにはいかない。

「これくらいは挨拶代わりだ、
エリス、一人増えるだけで危険が増すんだわかってくれ」

「そうなの？なら安心していいわ、私一人じゃないから」

エリスの視線の先、そこにはコレットとラヴィが居た。
「下界を見て回りたいそうよ。
そのうち、腕の立つ女たらしが通るから待ってればって教えてあげたの」

「エリス、俺は冗談が嫌いなんだ」
「『他人の吐く下手な冗談』がでしょ？」
「よくわかってるじゃないか」
もはや怒りを通り越して、呆れるしかない。
未開の地で複数の人間を守れだって？馬鹿な話だ。

「実はあの2人、仲が良いのではないのか？」
「私にはなんとも」
王と従者は既に外野に退避している。

「カイム、どう断ろうか考えても無駄よ、
もう聖女様からは依頼の前金を貰ってるから
まさか、牢獄の何でも屋が依頼を断るなんて事は無いわよね？」
身請け金を返してから、どうも金稼ぎに目覚めたらしい。

「ああ、わかった、やればいいんだろ、やれば
ただし安全は保障しないから！」

断ることは幾らでも出来たが、それでも彼女等は下界を進むだろう。
だったらより寝覚めの悪くない方を俺は選ぶ。

下界に降りた感動を味わう間も無く、
俺は適当に切り上げる算段を模索していた。

夢に咲く向日葵（後書き）

いきなり挿絵があってなんだと思われたかもしれませんが、
自分で描いたものです、読んでいる方のイメージを壊しそうで少し
ビクビクしてますが・・
とりあえず、風邪が治った記念ということでお試しです・・

話の方は原作からだいぶ離れたので、難しくなってきました。
もともと会話ばかり思いつくので、勢いだけなのは自覚しています。

今回、リシアとアイリスが何をしていたか想像が膨らめば
続きの前に戻って中間の話を書くかもです・・。

幕間～花冠の王様～

～Another view リシア・ド・ノーヴァス・ユーリィ～

「ぬ～眠い～」
下界に降りたノーヴァス・アイテルの朝は、少し遅い気がした。
空より落ちてお日様より遠のいたせいだろう、それは仕方が無い
だが、起床を遅らせてよいという理由にはならない。

「あ～今日は大地に降りるのだったな」
ゴシゴシと目をこする。いくら王とて、朝はまだ人の子だ。

手探りで寝台に備え付けのベルを鳴らす、間をおかず侍女が現れた。
この状況でも、いまだに私に仕える忠義者達だ。
今日は普段の流れを飛ばして、早々に着替えて出かけねばならぬの
だが・・
「問題は、どちらの服で出かけるかだ」
侍女の持つ、メイド服と一番地味な服、ここまで絞ることはできた。

「フィオネ・シルヴァリアです。
陛下、そろそろお出になりませんと・・」
「おお、よいところに来た」手短に状況を話す。

「は、お召し物でございますか？」
「うむ、お忍びであることは理解しているが、その、な」
いつかのように、あやつと行動を共にするのだ、
もう少し身なりをなんとかしたい。

「やはり、体を動かすのだからメイド服だろう」
「恐れ入りますが、そちらですと別の意味で目立ちます」
「そうか？」
「はい、ですのでこちらの方がよいかと」
そう言って、もう一着の服を目の前によこす。

「む～少し地味なのがな～」
「陛下によくお似合いと思います
カイムが私に選んでくれたものに近いですし」
「そうか、そうだな」

※　※　※

「そういえばフィオネ、ここで会ったことがあったな」
「は、そうでしたか？」
リリウムへ向かう道すがら、下層の一角まできた。
強い風が吹く、
用心のために持ってきた服とおそろいの帽子を目深に被りなした。

「私をカイムの妹と聞いて疑っていただろう」
「・・・ああ！あのときの」
「同じ服なのに、気がつかないものだな」
「それは・・・まさかカイムが連れているのが
国王陛下とは思いません」

「確かにな。そういえばひとつ気になっていたのだが、
あのとき『おまえは何人妹が居る』と言っていたな？」

「はい、カイムは以前ティア殿を自分の妹といって
我々を誤魔化していたことがありまして・・」

「なるほど、あやつらしいやり方だな」
「まったくです。女性の扱いに配慮がありません」

「いや、鈍感ゆえの距離感というのかな」

突き放しても、近くにいても自然な間柄
本人は必要最低限の関わりと
とっさの行動に違和感がでないからと考えたのだろうが

「それをやさしさと感じてしまう
まあ、それも女という生き物ゆえかな」
わかっていても抗えぬものだ。

「何の話です？」
「ああ、無意識の所作に知らぬ振りでのるのも女の器量だとな」

「はあ、よくわかりませんが、男はまず強さだと思います」
「フィオネの口から出ると、重く感じられるな」

「私は別に・・」
「よい、そなたにもし思い人が出来たときには紹介してくれ
私がみてやろう」
何事にも清廉潔白を貫くこの忠義者が選ぶ男に、少し興味が湧いた。

「はい、ありがたいお言葉ですが
しばらくはそのようなことはありません」

「すまぬな」女の幸せを捨てて私に仕えるか。

「ああ案外、カイムとお似合いかもしれぬな」
無意識に相手に責任を強いる所はよく似ている。

「わ、私がでございますか？
あんな軽薄な男、まかり間違ってもそんなことはありません」

「わかったわかった」
「陛下、そのようにお笑いにならず」
慌てるフィオネが可笑しかったので、それ以上詮索はしないことにする。
後ろから精一杯の否定の言葉を並べるフィオネとリリウムへ急いだ。

※　※　※

「邪魔をするぞ」

朝方の娼館といえば、
眠りに着く前の子供のようなものだ、とカイムが言っていた。

「何しにきた」
中ではアイリスが天井を眺めていた。

「うむ、カイムはまだ来ていないようだな」
「カイム・・？不能野郎なら最近見ない」

「そうか、少し待たせもらうぞ」

「すまない、ジーク殿はおられるか？」
「ボス？そういえばさっき戻ってきたかも」

「フィオネ」
「はい、少し話をしてきます」
今回の調査隊の件は牢獄の協力が必要不可欠だ。

「頼む」
階段を上がるフィオネを見送る。

「おまえは行かなくていいのか？」
「ああ、私のやるべきことは今は無い」
事前に話しは済ませて具体的な詰めはフィオネに任せてある。
一緒に出向いてもよかったがどちらかといえば、アイリスとの再開に少し興味が湧いた。

「無能な王様だな」
「有能でないことは認める」
アイリスの向かいに座る。

「また、茶を掛けられにきたか」
「そうだな、アイリスがそうしたいのであれば甘んじて受けよう」

「おかしな奴だ」
「いや、関所の広場で晒し首にされても文句の言えない身でな」
皮肉で言っているわけではない。
事実、和睦会議でジークがそれを要求するのであれば
自分にはそれを拒む理由はなかった。

「足が震えているぞ」
「頭ではわかっていてもな、やはり怖いものだ」
ここ数日、自分が晒し者にされている夢でうなされることもあった。

「わたしも・・・」
「ん？」
「わたしも、震えて眠れないことがある」

「意外だな、私よりも肝が据わっているように見えるが」
「王様よりも娼婦は大変なんだ」

「確かに生きることに苦労は無かったな」
「一度やってみるといい」

「それも面白いが、王を譲る気は無い」
「なんだ権力の犬か」

「今の私はお飾りの王様だ、何の力も無い」
「じゃあなんで？」

「自分でもよくわからん、言葉にした途端それが嘘になるようでな」
「おまえ馬鹿か？」
「利口でない事は認める」
それでも言葉にしなければならない時があるだろう。

彼女等がここに居ただけで今の境遇にあるのと、
今の時代にたまたま王となって、
たまたま今までの王族の責をとることになるのも、さして違いはないのだろう。

であれば、その役を自分だけが降りるのは何か違う
単純に言えばそんなところかもしれない。

「つまんない、張り合いがない」
「悪いな、代わりになにか付き合おう」
カイムはまだ現れない、何をぐずぐずしているのやら。

「じゃあ」そういってテーブルの下からチェス盤を取り出した。
「できるか？」

「無駄に王族だったのでな、一通りの遊戯は嗜んでいる」
「よし、何を賭ける？」

「お互いの大切な物でどうだ？」
「構わない、でも金目の物は無し」
「こちらは構わないが？」
「お金は仕事以外ではもらわない」

「なるほど、では私は花冠をかけよう」

「ふざけているのか？」
「そう思うかもしれないが、これは私の誇りだ」
被ってきた帽子の裏から、
父へ送りそして手元に戻った花輪を取り出した。

「調度いい、ここにも花輪がある」
アイリスは背中から、真新しい花輪を取り出した。

「ほう、どうしたのだ？」
「ここを出て行った知り合いの贈り物」

「よいのか？」
「お飾りの王様にはきっとお似合い」
「言うではないか、いいだろう」

こうしてお互いの花輪を賭けて、アイリスとチェスを始めた。

しばらく無言で打っていたが
「おい」
「なんだアイリス」

「おまえ勝つ気があるのか？」
「勝負がついたら、そなたはそうそうに寝るつもりだろう」
打ってみてすぐにわかったが
私よりも断然アイリスの方が腕は上だ。

「そうだ、今日は何人も相手をして疲れた」
「よいのだぞ、私の不戦勝でも」
だが、負けないように打つのならなんとかなる。

「ずるいぞ、堂々と勝負しろ」
「これも戦略だ」
すねた顔をこちらに向けるが、眠気には勝てないようだ。
数回呼吸をするうちに、体が斜めになっていく。
「あら、こんなところでアイリスったら」
いつの間にか背の高い娼婦が横に居た。
「すまない、仕事終わりに人待ちで付き合せてしまった」
「構いません陛下、ここでは同じ年頃の娘は珍しいので
はしゃいでいたのかもしれません」
アイリスの寝顔見るその娼婦は少し嬉しそうだった。
「ならばよいのだが、よければこのまま寝かせてやってくれ、あ～」
「クローディアと申します。国王陛下」
「ではクローディア、アイリスを頼むチェスはまた今度にしよう」
言いながら、自分が次に打つ手を記した紙を添える。
「封じ手ですか？」
「うむ、次に会う時にな、クローディア立会い人ということでよいかな？」
「畏まりました。盤はわたくしが記憶しておりますので、
いつでもお越しください」
「世話を掛ける」物腰といい、その記憶力といいたいしたものだ。
「そういえば、カイム様でしたら先ほどお見かけしたので

じきにこちらに来られるでしょう」
クローディアはアイリスを抱き上げ奥に行く前にそう残していった。

「やれやれ、気の置けない場所だなここは」
全て内密なはずなのに私がここに居ることから鎌を掛けたのだろう
すぐに側近にして連れて帰りたいくらいだ。

奥に消えるクローディアを見送ると、入れ違い入り口に影がさした。
振り返り、待ち人に満面の笑みを送る。

「おう、カイムではないか、遅かったな」

こやつを物にできれば、それも可能なのかもな
アイリスとお互いの花冠を被り笑いあえたら、
カイムの呆れた顔を見ながら、ふとそんなことを思った。

幕間～花冠の王様～（後書き）

実は風邪がぶり返して寝込んでました。こんなに調子を崩すのは数年ぶりです・・とりあえず気をつけます・・。

リシアとアイリスは強烈なファーストコンタクトだったので、再開したらどうなるかと思って書きました、いろいろあっただろうアイリスが多少軟化してくれていればなと願いをこめつつ・・。

とりあえず、次で本編に戻ります。残り2回の予定で、5月中に完結のつもりでしたが少しずれ込みます。

ロストドール・ディバイデッド

目の前の影がドサリと落ちる。
ボロ布を纏った男は、首筋から血を噴出しながら呆気にとられた顔で倒れていった。

俺は一切の感情はのせず、ただ冷静に降りかかる刃を引け
目の前の相手の動きを止めることに集中する。

無心で人の命を消す、それが心ある仲間を助けるためとは矛盾もいいところだ。
そんな感慨もすぐに消し去り辺りを見渡す、動くものの数は減っているようだ。

背中に気配を感じた。
「数は？」
「ここまでで４人」
背後から聞こえるフィオネの声は緊張したままだ。
辺りに視線を巡らす、森の中で視界は悪いが
それでも動くものが発する気配はわずかに感じられる。

「じゃあ、あと2人だ」
「私の方が多いか……
　カイム腕が落ちたのではないか？」

「誰かさんのおかげで、無理なリハビリさせられちゃあな

騎士団長候補様に花を持たせてるんだ、ありがたく思え」
「それは重畳だな」
言葉を合図にお互い残りの敵へ走り出した。

疑いだしたらきりが無かったが、
やはり今回の『都市外縁調査隊』は別の目的が透けて見えた。
というより、たくさんの思惑が絡みすぎて全容は誰も理解していないとも思っている。

俺がわかっているのは、
リシアとコレットは本気で大地を見たがっていたことと
ジークがそれに護衛を付けるという名目で俺を駆り出し、
この状況を何かに利用する気でいること
そして――

「終わったか？」
「ああ、今日はこれで3回目か…」

「いや、4回だ。前に休憩したときに別の集団を見つけた」
「やるではないか」

「おかげさまでね」

この『調査隊』が命を狙われているということだ。
出発して2日目が経とうとしていた。

「カイム無事か？」
「それは俺のセリフだ」

リシアを先頭にコレット、ラヴィ、エリスがやってくる。
全員ボロボロで、リシアにいたっては返り血で服が真っ赤に染まっていた。

「しかし、大地に降りて一番の危険が同じ人とわな…」
リシアが剣についた血をふき取りながらひとりごちだ。

「いいじゃないわかりやすくて」
「面倒なことには変わりない」
まだ未知の獣の方が可愛げがある。

「大方、無能だった王に天誅を下すためでしょう」
「ちょ、ちょっとコレット」

「聖女の復活を快く思わない輩かもしれんぞ」
「おまえら、いい加減にしろ」

どうにもリシアとコレットは仲が悪い、大地に降りた直後からこの調子だ。
公的な立場で既に相容れない2人、こんな特殊状況下ではなおさらだ。

「仕方ない、もう日が落ちるがなるべく離れた場所で野宿だ」
「また、歩くのですか？」
「聖女には辛かろう、いいのだぞ一人で帰っても」
「だから、いい加減しろと言ってる！」
仲良くしろとはいわないから、せめて静かにしてくれ。

ほどなく、見通しが利く場所をみつけて野営の準備に入る。
適当に役割を分担して行動に移った。

おおまかには焚き火のための薪集めと食事の準備だが…

「薪、無いですね」横を歩くラヴィが呟いた。
俺、エリス、コレット、ラヴィで偵察も兼ねて集めているのだが全く見当たらない。

大地に降りて気がついたことだが
植物はあるのだが、動物は今のところ小動物の類しか見かけない。
更に薪に使うような枯れ木も存在しない。
それも当たり前だ、この大地は生まれたばかりなのだから
天使の力がどのように作用したのかは、たぶんティア自身にもわからないのではないか
向日葵みたいな奴だったからな大雑把でも仕方ない。

「手ごろなのなら生木でも構わん。エリス、確か発火薬あったよな？」
「あるけど、少ないから無駄に使えないわよ」
便利屋みたいに使わないでよねと呟いて包みをよこす。

「でも、どうしてこんなことをするんでしょう……」
うな垂れてラヴィがこぼす。

「確か内密だったはずだよな、コレット達は？」
「ええ、私たちも目立たぬように出てきましたし」
これから新しい教会を立ち上げようという人間だ、用心して当然だろう。
教義の主軸になる天使が浄化した大地、聖女としては見ておかなくてはならないらしい。
できればこの大地を拠点としたいとも言っていた。

「まあ、一番上にいる人間って恨まれるのも仕事よね」
「それは私に対する皮肉ですか？」
「そう感じたのならそうなんじゃないの？」
「否定はしませんしそういったものも、甘んじて受ける覚悟はあります」
こういった気概はリシアと同じなのだが言わないでおこう。

「ああ、そうだカイム」
「何だ？」
「そこで水が沸いてるのを見つけたのよ」
「……それで？」既にやっかい事の気配しかしない。

「返り血とか気持ち悪いし、水浴びがしたいんだけど」
「ああ、いいですね」ラヴィが能天気に同意している。

「許すと思うかバカ」
「すいません……」
「いや、ラヴィに言ったわけじゃないぞ」
「じゃあいいんだ」
「だから、ダメだと言っている」これだから女は嫌なんだ。

「私からもお願いしたいのですが」
「コレットもか、お願いと言われてもな……」
「一度、天使様の浄化された地で身を清めたいと思っておりました」
ダメだ既に思考が聖女様になっている。

「あ～わかった、リシア達が賛成したらな」
どうせ今までの流れなら反発するだろう、そう高をくくっていたのだが…。

「私は構わないぞ」
「何で！」
薪集めをそうそうに切り上げて聞いた答えに、なんだか少し泣きたくなった。

「いや、何でといわれても困るのだが」
困惑顔のリシアを尻目にフィオネに救いを求めたのだが…。

「私が護衛につけばよかろう、
カイムはこちらが見えない所で警戒していてくれ」
「そうじゃない。そうじゃないだろうフィオネ！わかるか？
ついさっきまで殺し合いをしていたんだ、目的も規模も分からない奴等がいるんだぞ！
そんな中で水浴びだぁ？ふざけるもの大概にしろ」
一気に巻くしたてたので息を吸い込む、全員の視線が集まるのを感じた。

「カイム、おまえが言う事もわかる」リシアがなだめる様に口を開いた。

「だが、今の私達はお世辞にも結束しているとはいえない
おまえの意見は的確だが、それを聞いて動く私たちは必ずどこかでミスをする。
それでは遅いのだ、どこかで立て直すきっかけが必要だ」

「それが水浴びか？」
「別になんでもよかったのだが、
今のカイムの話を聞いてちょうど良いと思った、だから私は賛成したのだ」

生真面目に語るリシアに少し呆気にとられた。
「なんだか俺の方が小さく感じる」
「そう感じるだけお前は純粋なのだろう、
それに私は王だぞ、誰よりも大きくものを見なければならない」
「話はまとまったみたいね」言いだしっぺのエリスがこちらを見る。
「勝手にしろ」そう言う他無い状況だった。
「覗いちゃダメだからね」
「誰がっ！」それでも不安は拭えないのだが…。

※　※　※

～Another view　エリス・フローラリア～

カイムはまだ渋い顔をしていけど結局、私の言い分が通った。
「綺麗な水ですね」
聖女様のお付きの子、ラヴィリアは個性の強いこのメンバーの中で
接しやすい性格だ。
「そうね、でも気をつけないと襲われちゃうわよ？」
「うう、怖いこと言わないでください……」
どこかあの小動物――ティアに似ている所があったからかもしれな

い。

「でもよかったの？聖女様に付いてあげなくて」
カイムの譲歩で人数を分けることになったので私は先に
ついで、このラヴィリアが手をあげたのだ。

「はい、いつまでも一緒というわけではありません
それに、さっきのお話ですとコレットと陛下の溝を埋めるべきだ
と思いますし…」

「ふうん……」それなりに頭は回るらしい。

「ねえ、あなた達ってこれからどうする気なの？」
「ええと、都市に戻ってからのことですか？」
「そうよ、何かまた教会とか始めるそうじゃない、本気？」
折角、死ぬ思いをして面倒な過去を清算できたのだから
わざわざまた同じ事をする神経が正直理解できない。

「それにあの聖女様、カイムに惚れてるでしょ？」
「な、え、えっと、そ、そんなことは無いと、思いますよ……？」

「あなたが慌てる必要ないんじゃない」
「ええ、まあ、そうなのですが……やっぱりわかりますか？」
「もうバレバレ」見ているこっちが恥ずかしくなるくらい。

「はぁ～そうですよね～」だらしなくため息をつく、意外と話せる
子だ。

「だからよ」
「はい？」

「また聖職者になったら、恋愛とか結婚とかできないんでしょ」
「それでしたら。あくまで代表という立場になるだけだから
昔みたいに厳しい戒律で縛ることはしないそうです」

「何それ都合良すぎない？」
「ええと本人曰く、『天使様の声を聞けるこの血を絶やしませんわ』
だそうです」
聖女様の口真似をしていたがあまり似てなかった。

「まあ、少しは見直したわ逞しいところがあるんじゃない」
「エリスさんもそんなことを言っていてよいのですか？」

「何よ？」
「え、だって、エリスさんは確かカイムさんが身請けされたと……」

「ああ…」
カイムに身請け金を返したのはお互いしか知らないし、訂正するのも面倒だった。

「いいのよ、私はカイムの近くに居たいだけだから
あんな面白い男そうそういないわよ、
牢獄の何でも屋を気取ってるわりには変なとことで真面目だし、
他人にご大層な説教をたれるくせに自分ではもっと単純な悩みも
解決できない
強がるのに脆過ぎるのよ……」

だからあの雨の日私を突き放した、お互いのためだと強がって。
今でこそ、この選択自体が悪いものではなかったと思える。

そして、私は人形と人の境の上を危なっかしく歩いてみせて
また、単純で面倒な悩みを抱えている彼を少し困らせてやるのだ。
そうする『自由』が、今私がもてたものだと信じて――

「すいません……無神経に聞いてしまって」
「いいのよ、あの頃の牢獄ではよくある話だわ
それより、ちょっと聞いて欲しい話があるんだけど」

よく話してみると、伊達にお付きをしていたわけではないとわかって
ちょっとお願いをしてみることにした。

※　※　※

～Another view　コレット～

「お付きもつけないでよかったのか？」
隣で水をすくうことに飽きた、一糸まとわぬ姿の王がこちらに声を
かける。

「ラヴィはもうお付きではありません」
それが軽口の挑発だとわかっていても、ついカッとなってしまう。

「そうか、こんな未開の地まで歩みを共にする者はそうそう無いか

らな」
「私とラヴィは教会に拾われる前から一緒だったのです
立場だけの繋がりではありません」
「なるほど、それで生死を共にか……羨ましい限りだ」
「王こそ、何故あそこで死を選ばなかったのです」
和睦会議での流れで話が及ばなくても、
この王なら生き恥を晒すことを由としない気がしていた。
「どうしてかな、聖女達のように復活してみせるのも面白いかもな」
「ふざけたことを……」
「では聖女に聞くが、あの茶番で貴様も政争を担う一翼になったこと……
自覚していないとはいわせないぞ？」
「もちろん、そのための『天使教会』だと理解しています」
「それにしては、議員数が2割とは随分おとなしいではないか」
「その2割が重要だと、王ならご存知でしょうに」不適な笑みの王を見据える。
「ふむ、まあ、敗北した王国軍に反乱軍と同数の4割りを回したことのほうがな、
普通は疑う所だが貴族連中は当然と受け止めている」
「さすが、思考停止した方々は、
自分に都合の良い話をお疑いにならないのですね」
「言うな。早い話、狙いは過半数への巻き返しだろう？」
「そうですね、正確にはそのための手段を選ばない強硬派」

いつの間にかこの『調査隊』が狙われる理由に話が移っていた。
「会議の結果に納得のいかない反乱軍側かもな、私が狙いの」
「反乱軍と教会の過半数を切り崩すための貴族様方かもしれませんね、私が狙いの」
目が合う、きっと同じように笑っているのだろう。

「どう思う？」
「意外と両方ではないですか？」

「奇遇だな、私もそう思っていた」
「どうせ、最初から全て解っていたのでしょう？」
答え合わせをするような今までの会話や、ここにきてあまり驚いた様子の無いこと
つなぎあわせれば何のことはない話だ。

ここまでの仕掛けは反乱軍、ジークさんと話を付けないと不可能だろう。
事前の会議では完全に決裂していたようだったけど、
所詮偶像の聖女をやっていただけのわたしでは、根回しや腹芸等に敵う気がしない。

「そこまで解ってなお、このまま一緒に居続けるか聖女？」
「ことここまで事態が進んでいるのならば、一緒に居ることが一番安全です」
「賢明な判断だ」

「そんなことより、随分と大胆に命を投げ出すのですね」
どう考えても生きて帰れる方が確立として少ない。

「多少の保険はかけてあるが、
高台から飛び降りるよりは賢い命の使い方だと思っている」
「打算的すぎて、頭が上がりませんわ
そんなにカイムさんを信用しているのですか？」
「なんだ？あいつの腕と知識は十分役に立っている
聖女こそどうなのだ？」
「わ、わたしは別に……」
「顔が赤いぞ」
「そういうあなたはどうなのですか、
聞けば城の私室で一緒に居たというじゃありませんか」
ジークさんから聞いた話なのでどこまで本当か知りませんが…。
「ああ、そんなこともあったかな。正直、あの男は嫌いではない」
「……！？」
「もしあやつが私を望むというのであれば、それもやぶさかではない」
「そ、そんなことは私が許しません！」
後から考えれば、カイムさんのお心はティアさんに向いていたので
ここまで取り乱す必要はなかったのですが、まんまと国王にのせられてしまっていました。
「そんな残念な胸をして、何を言いますか！」
頭の中では、勢いに任せてとんでもない事を言ってしまったと思ったがもう遅い。

「貴様！言うてはならんことを……
少し見直してやろうと思ったが貴様だって似たようなものではいか！」
王の顔がみるみる赤くなる。今までどんな皮肉にも反応しなかったのに、
王も女であることがわかって少し安心した。

「自分を棚上げして何を言いますか！」
最初の緊張感はどこへやら、その後も延々と醜い泥仕合を演じ
更にあまりに騒がしいので、カイムさんが飛び込んできてしまう始末……。

良くも悪くも、あの王のことがよくわかった出来事でございました。

※　※　※

「見ましたよね？」
「何が？」
真っ白い夢の中、寝そべる俺の視界を逆さで覗くティアの顔が埋め尽くす。

「だから見ましたよね」ずいっと更に顔を近づけてきた。
「こっちは命懸けなんだ、馬鹿話をしている方が悪い」
今まで現実の話題に触れることが無かったので気にしなかったが、
やはりある程度わかるらしい。

「あ～あ～見たんですね、私というものがありながら見たんですね～」
「そこで錯乱するな、第一ティアはもうあそこに戻ってこれないんだろ？」
こんな形で切り出したくなかったが仕方ない。
現実の俺が抱え。今、直接話ができるからこそはっきりさせなければならないことがある。

「それはそうなのですけど……」
案の定うな垂れてしまった、ちゃんと話してやらねばならない。
俺は体を起こして正面からティアを見た。

「こんな聞き方は卑怯だと思うが、
ティアが消えてしまったことから現実の俺は立ち直れていない。
混乱するからここの記憶を戻させてはいないが、いずれ何らかの答えは出すだろう
それを見るのが嫌なら……」
ここにお前が居る事を教えてやっても、
最後まで言葉にできなかったが、ティアはビクッと震えてこちらを見る。

「そんなことはありません、嫌なんかじゃないです」
毅然と言い放つ顔はいつになく強い顔をしていた。

「ほんとの事をいいますと、
私はカイムさんがちゃんと幸せに歩めるのかが心配で見にきたのです」

「そうか、それだけ俺は危なっかしかったか？」

「あ、いえ。実は、私もカイムさんに助けられる前に
『私がいなくなって、忘れられて、
誰か他の女の人と幸せになるのが許せない』って思ったんです」
「じゃあどうして？」それは当然の反応だと思う。

「でも、カイムさんが来てくれて私を最初に選んでくれて、嬉しくて
そういうの全部吹き飛んじゃいました」
俺の好きな笑顔でそう言った。

「単純でいいなお前は……」
まともに顔を見ることができずにティアの頭を寄せて撫でた。

「現実の俺はその先の答えを出さなきゃならんのか」
「はい、カイムさんならきっとできます」

「根拠の無い自信だな…」
「あう、すいません」
「だが、そういうのは嫌いじゃない」それが成功する様を自分の中
で想像してみる。

「はい、私が安心して羽ばたけるようにあなたの答えを見せてくだ
さい」
そう言って俺の天使様は胸の中でいっぱいの笑顔を浮かべていた。

ロストドール・ディバイデッド（後書き）

水浴びとか、わりとありがちなシチュエーションですが
このゲームの本編ではまずありえないことなのでやってみました、
色気も何も無いですが……。

それなりに予定通り進んでいるので、たぶんあと一回で終わります。
お話を終わらせるということがどれほど難しいか、未熟者ながら実
感しているこのごろです。

ノーブルホワイト

緊張状態を維持するのはそんなに難しいことじゃない。
夜、フィオネと俺の交代で襲撃の警戒にあたる。

リシアも剣を使えるが、まともな戦闘ができるのが2人しかいないのだ、
体力の消耗は避けたかったが仕方あるまい。

襲撃者達も用意周到なことで、ノーヴァス・アイテルから
一日では戻れない距離になったのを見計らってから仕掛けてきている。
おかげで安全確保にいたずらに時間だけを費やしてしまった。
しかし、こうして夜を過ごすたびに確実に戦力の2人は消耗している。
決断するには遅すぎるぐらいだ。

何度目かの仮眠からの目覚め、良くはないが普通に動く分には問題ない。
辺りを見回す、大きな木の根に寄り添うようにそれぞれ簡易毛布にくるまっている。

「交代するぞ」
向かいで焚き火の番をしているフィオネに声をかける。
夜明けには間がある、焚き火の明かりだけが周りを照らしていた。

「……うむ」
「大丈夫か？」
返事はしたものの、フィオネはずっと火を見つめたまま顔を上げない。

「いや、なんでもない。少し遠くにきたなと思ってな」
「一日歩けば戻れる、それほどでもない」
もっと別の事を言っているのだろうが、適当に流す。

「聞かないんだな？」
「のってやってもいいが、俺は宗教屋じゃないからな」
火にタバコをかざす、いつだがジークにもらったものだ。

「吸い終わるまでなら付き合ってやる」
「……それはありがたい」それでも気のない言葉が漏れる。

「これは本当に必要だったのか、とな……」
「おまえ等がわかって始めたんだろ？」
今回の『調査隊』のことを言っているらしい。

「うむ、今回のこと
ちゃんとカイムにも話をしておくべきだったなと思ってな」

「いいさ、ようは護衛だろう。イレギュラーはつきものだ」
吸ったものを溜めた息と共にはく。
紫煙が焚き火にあてられゆっくりと上っていくのをぼんやり眺めた。

「それとも、何か俺に気を使っていたのか？」

「うん……まあ……ティア殿のこと、正直どうなのだ？」
「単刀直入だな」
「すまない、どうにも回りくどいのは苦手なのだ」
「そうだな、弱っている。それもかなりな
出発前にお前をつき合わせて飲んだくれているくらいだからな」
「……大の男が、もう少し矜持は無いのか？」
「フィオネから聞いてきたんだろう、俺はそのまま答えただけだ」
「私を悪者にするな、開き直ってよく言う」
「それだけ余裕が無いんだ、何かしていないとダメになりそうで……
だから今回の話は、細かいことは気にせず動ける分助かってる」
「カイムはそれでいいのか？」
「何が言いたい？」
「私にはそうやって時間にまかせて、精神をすり減らしていくように見える」
「気のせいだ」
「ならいいのだ、ただ太刀筋に迷いを感じた。
それも『気のせい』ならいいのだが」
言葉でなら幾らでも誤魔化せるのだろうが、こればかりはそうもいかない。
「カイム、お前が大事なのはそうやって過去を引きずることなのか
それとも目の前、これから先のことなのか……」

「ここから戻れなきゃ、どちらも出来ないだろ」
我ながら卑怯な言い方だと思った。
「……そうか、そうだな」何も言葉を返さずフィオネは横になる。
フィオネがそうしていたのように、焚き火をじっと眺める。
タバコはとっくに燃え尽きていた。
俺は手に残るそれを、口の中で毒づきながら少し乱暴に火に放り込んだ。

※　※　※

夜明けと共に移動を開始した。
なんとしても日が暮れるまでにはノーヴァス・アイテルに戻らなければならない。
警戒しながらの移動はけして楽ではないが、速度を落とすわけにもいかない。
そんな焦りの中、襲撃者達が再び現れた。
「視界が悪いのは相手も同じだと思うが…」
今だ森を抜けられずにいる、
ここを出れば平原が続いているからそう目立った事はできない。
「荷物は捨てろ！都市に戻れば薄い毛布ともおさらばだ」

相手もここが正念場と踏んでいるのだろう、今までよりも人数が多い。

「フィオネは全員を安全な所へ！」

「しかし、カイム！」

「大丈夫だ、簡単に死にはしない」

囲まれないように位置を変えながら、なるべく時間をかせぐ。

無言のまま一人が切り込んできた。

「悪いが俺には余裕がないんでなっ！」

一撃をかわして、急所にナイフを滑り込ませる。短い悲鳴をあげて動きが止まった。

「そのまま寝てろ！」相手の集団に向けて蹴り出す。

それを避けながら左右から2人が新たに向かってきた。

それぞれの剣を両手のナイフで受ける。

相手が押し切ろうと力を入れるタイミングをみて、

ナイフを放し、体を低くして地面を蹴った。

体制を崩している相手に懐の投げナイフを放る。

切り込んできた2人はそのまま動かなくなった。

「来いよ、俺を倒さないと先へは進めないぜ」

今は何も考える必要が無い、ただ生きようとする思いが俺を動かす。

そうやって戦いに逃げることと、戦いのために周りを巻き込むことどちらがより愚か者かそんな考えが一瞬頭を掠めた。

～Ａｎｏｔｈｅｒ　ｖｉｅｗ　フィオネ・シルヴァリア～

「あやつは大丈夫だろうか？」
横に並ぶ陛下が後ろを気にしながらこぼした。

「今は御身の安全を」同じ思いだったが不安を振り切るように陛下に返す。
「わかっておる、わかっておるが……」

「何か、生き急いでいる感じよね」
「それを自覚して躊躇しているようにも見えましたわ」
エリス殿と聖女がそれぞれの見地から語る。

「朝、そこの剣士様に諭されたんだから多少はマシなんじゃないの？」
「聞いておられたのかっ！」正直恥ずかしい。

「そりゃ、聞こえるでしょ。それとも私達はお邪魔だったかしら？」
「エリス、あまりフィオネをイジメないでくれ」
みな緊張が限界なのだろう、しかし油断するわけにもいかない。

言っている傍から他に動く影を捉えた。
「みんな下がれっ！」

「はぁー」捉えた影に低く飛び、着地と同時に剣を振り下ろす。

「陛下！お急ぎください！」
1人倒したが、2人、3人とこちらに動きを合わせてくる。

「すまぬ、フィオネ死ぬなよ」
陛下達が後ろを走り抜ける、その中で逆に走る影がひとつ。
「エリス殿？」
「ごめん、先に行ってて」
振り向き止めようとするが、目の前の敵がそうさせてくれない。
「エリス殿！」
声で人が止められれば、そう思ってありったけの声をあげたが
戦いの音ですぐにかき消された。

※　※　※

息をつき、足に活を入れてまた踏み出す。
「あいつら……どこまでいった」
走りながら、彼女達が倒れているところに出くわすのではないかと
いう
最悪の想像を振り払う。
「くそっ！」出会い頭に襲撃者を切り伏せる。
そしてもうひとつの影に刃を立てた。
「どうしたの？そんなに急いじゃって」

「エリス……何をしている…」
反射的に動いてしまい、お互いが喉元に刃を立てる格好になった。
「あの雨の日の続き……かしら？」
「ふざけている場合じゃないだろう、リシア達は？」
「大丈夫じゃない？フィオネだけじゃ全員守れないでしょ？」
「それはそうだが……」それだけが理由じゃないだろう。
「それにしても、これであなたも戻ったら英雄ね、
そうやって情けない自分を上塗りしていくのかしら」
「そんなんじゃない」
「そう？男ってすぐに仕事に逃げるのよね」
「エリス……」何か言いたかったが言葉が見つからない。
「ここでカイムが自分の悩みをそのままにしたら
きっと一生そのままでしょうね」
「そんなことは……」
「無いって言える？この後きっとあの都市はよくなるわ
王様も聖女も変わっているけどそう悪い人間でもなさそうだし、
こんなくだらない殺し合いも無くなるはずよ。
でもね、そんな平凡な生活の中できっとあなたはこう思うわ
『あのとき痛みに耐えられたのだからこの思いはずっとこのまま仕舞っていこう』ってね
ティアを失って悲しいのは誰？少なくともあなただけじゃないわ！
牢獄でティアに救われた人はもっとたくさんいた、
あなたはたまたま一番近くにいただけじゃない。
そんな自分だけが悲しいって顔して、乾いた笑いを浮かべて欲し

くないのよ！」

こんなエリスを見るのは初めてだった。
生死を分ける場所で何を言っている？いや、だからこそなのか。
目の前のことだけを考えて、やり過ごして
いつの間にか全てに折り合いをつけるようとしている自分に――

「自由に生きろと言いながらあなたはどうなの？
自分から檻に閉じこもってるじゃない！
『生きて幸せになるお前が見たい』って言ったわよね？
人間は幸せになるために生きるんでしょ？それがあなたの幸せなの？
私は変わったわ！カイムが背中を押してくれたおかげでね！
でも、あなたは……あなたが自分自身にかけた呪いはいったい誰が解けるというのよ！」

顔を上げてエリスを見据える。
「俺は……！？」やっというべき言葉を探り当てたとき視界の隅に光るものを見た。

「伏せろ、エリス！」華奢な体を抱き、間に入る。軽い衝撃と共に背中に鈍い音が響いた。

「！？……カイム？ねえ、カイムどうしたの？」
弓矢か何かだろう、背中が熱くなり立っていられなくなる。

「すまん……エリス……」
「馬鹿！どうしてそうやって……目の前のことばっかり……」

俺は、あいつのために泣ける場所を探していたのかもな
急速に遠のく意識の中できっとそれが答えなのだろうと思った。

※　※　※

「カイムさん、死んじゃ嫌ですよカイムさん」
白い空間でティアが泣いていた。

「俺は……どうした？」どうやら寝かされているらしい。

「大怪我したんです。このままここに居てください。
目を覚ましたら死んじゃいます」
言いながらこちらに手をかざし背中の羽を広げた、淡い光が俺を包む。

「いや……ダメだ！エリス達を助けないと！」
体を起こすと全身に痛みが走った。

「うっ……くそっ！」
「じっとしていてください」

「時間が無い、こうしている間にも……」
フィオネ達はどうしたのか、はやく確かめなければならない。

「でも、でも……」
「何か方法は無いのか？」
「……あります」
「じゃあ！」
「でも……私が、もうカイムさんに会えなくなっちゃう……」
「……！？」
「きっと、もうここでカイムさんに会えません」
残酷な選択だ。それでも俺は……。
「……やってくれ、ティア」
「カイムさん！？」
「だが、俺はもう一度ここに戻る。だからティア、頼む！」
「わかりました……ここでお待ちしてます」
何の根拠も無く言い切った俺を問わず
ティアは翼をはためかせ、目を閉じ祈りはじめた。

～Another view　ラヴィリア～

私は、怖くて怖くてしかたありませんでした。
「コレット、待って、もう走れないです…」みなさんについて走るのがやっとです。
「ラヴィ、急ぎなさい」
そんなこと言われても、ここまで慣れない森の中をなんとか走って

きましたが……。

「フィオネ、カイム達を見たか？」
「いえ、エリス殿が向かったようですが……」
カイムさんとはぐれてだいぶ経ちます。

「聖女よ、そちらはどうか？」
「正直言いますと、私も体力の限界です……」
私を叱咤していたコレットも肩で息をしています。

「少し休むか。フィオネ、周囲を警戒しろ」
「はい」
陛下が指揮をとります。
出発のときはコレットが口を挟んでましたが、今はそれどころではないです。

そんな私達の行動を見ていたのでしょうか、また、人影が数人現れてました。
「くそっ！」
「陛下、お下がりください！」
私とコレットを守るように二人が間に入ります。

「しかし、このままだとジリ貧だな」
「王よ、私を置いてあなただけでも逃げなさい」

「できない相談だな、私は全国民を守ると誓った」
「それは世迷言です。切り伏せ今なお剣を向ける相手も国民でしょう。
自らを象徴とするなら非情の決断もいとわず下しなさい！」
「その矛盾を含めて尚、誓いを通さねばならん！

聖女を犠牲にして戻っては浮かんでいた時と何も変わらん！」
コレットは陛下が悩んだ末に剣を向けていることを知っているだろう。
それでも陛下は頑なだった。
人影は少しづつ私達を取り囲みはじめている。
「まさか、大地で逝くことになるとはな……」
「天使様の浄化した大地でなら、言うことはありません」
「都市が本当に祈りで浮かんでいたのなら、
貴様の命尽きるまで落ちることはなかっただろうな」
「その間、あなたが国をまとめることができたか疑わしいですけどね」
「言ってくれるな……」
こんなときでも皮肉を言い合う2人には関心するしかありません。
意外と覚悟を決める意志の確認だったのかもしれません。
いよいよ最後の時と思った瞬間、ゆっくりと歩いてくる影がひとつ倒れました。
その後ろから見慣れた姿が一人。
「……！？」
「カイムか！」
無事でいてくれた事は嬉しかったのですが、カイムさんに何か違和感を感じました。

※　※　※

４人がまだ生きていたのを見て安心した。
だが、襲撃者がいなくなったわけではない。

包囲しようとしていた奴等にゆっくりと歩み寄る。
隙だらけで近づく俺を不審に思ったようで、こちらを警戒し始めた。

それでいい、俺はあいつらを助けなきゃならない。

歩みはそのままで近くに居た奴に目標を定める。
そいつは剣を構えて少し震えていた。

何も怖がることは無いさ、俺は丸腰であることを見せびらかすように両手を開いた。
そのまま剣の間合いに入る、そいつは意を決して踏み込み俺を切った。

「カイム！」

誰かが叫んでいたが気にしない。
今はこいつらが２度と戦う気が起きないように捻じ伏せなければならない。

胴を斜めに切られた血が吹き出る。生き物だから当然だ。
だが俺は倒れない。

「残念だったな……」
呆気にとられているそいつの剣を奪う、そいつは取られた事に気がついていないだろう。

「俺には……守護天使様がついてるんだよ！！」
奪った剣を力いっぱい叩きつけた。

瞬間、次の敵を求めて走る。切られた部分が熱を持ち始めた。
同時に俺を淡い光が包む。

「あれは……終わりの夕焼け（トラジェディア）！」

次の敵も同じように無造作に剣を叩きつける。
その頃には切られた傷は無くなっていた。

これほど、無様で何の策も無い殺しは無いだろう。
俺は避けず、攻撃を受け、怯える相手に剣を振り下ろす、ただそれだけだ。

「カイム、止めるんだ！カイム！！」また誰かの声が聞こえた、泣いているようだ。

自分でも自身が光っているのがわかる。
あの都市で生きてきた奴に、この光に恐怖を感じない奴はいない。
予想通り襲撃者はバケモノを見るような顔をしていた。
そうだ、それでいいそうやって恐怖を感じたまま――

「死ね」絶命して崩れる、周囲に恐怖が広がるのを感じた。

あいつらを守るためには、こうすることしか思いつかない。
エリスを庇い、気を失った後、この光と共に目が覚めた。

何があったかはわからない。
だが、コレットが言うようにティアが会いに来ているのなら
やはりこの光はティアなのだろう。

すまないなティア、俺にはこんなことしかできない。
助けるために力を貸してくれたであろうティアに、ただ謝ることしかできなかった。

所詮穢れた命なんだろう、どこまでいっても変わらない。
昔、牢獄に来てその日のうちにボロクズになった聖職者が熱弁をふるっていた。
曰く『この穢れた牢獄こそ心に浄化が必要なのです』

そいつの言葉を借りればティアはまさにそんな存在だったと思う。
本当に『清浄』な力があったのは上等な皮肉かもしれない。

その『清浄』な力を借りて穢れた男が、
冴えたやり方の一つも浮かばず恐怖を撒き散らすのだ。
どうしようもない事この上ない。

ただ、そいつはこうも言っていた
『畏怖の対象として清浄も穢れも厳密に区別できるものではない』と
俺は都合よく今の自分への言い訳として思い出したが、
あいつに届けてやりたかった言葉だなと思えた。

自嘲気味な笑みがこぼれる。
こんなときでも、そんなことが考えられる自分が可笑しかった。

残るはあと1人、こんなことはさっさと終わらせよう。

※　※　※

～Another view　コレット～

カイムさんは私達の前で、襲撃者達の命をを次々に奪っていきました。
その行いの残忍さにフィオネは動けず、ラヴィは震えるばかり。

「カイム、止めるんだ！カイム！！

王は自分の守るべき者同士のあまりに無残な行いを止めようと
涙を流しながら叫んでいました。

「……」

私はただそれを見守ることしかできない。
そこに、天使様の悲壮な意思があり、今のカイムさんはそれと知らずに、
自分を犠牲にしてまで考えうる最良の選択をしている。

誰の行為も咎めることはできない。

ただ、一刻もはやく終わってくれることを願うばかり。
最後に薄く笑いながら、カイムさんは向かってくる全てを地に伏した。

「あ……ああっ」王は既に立つ力も無いようだ。
カイムさんもその場で膝を付き動かない。

「……コレット？」
私が走り出したのに気が付いたラヴィが声が掛かる。
返している暇は無い無言でカイムさんを目指す、急がなくては天使様の力が弱まっている。

それがどんなことを意味するかはわからない
直感で、これであの２人は永遠に分かたれてしまう、そんな気がした。

「カイムさん！！」
肩を掴んで揺するが反応は無い。

「カイムさん、しっかりなさい！天使様がっ！」
「……あ、ああ」
小さな声でやっと反応があった、目だけをこちらに向ける。

「……すまない、俺は…ティアに……」
「何も言わずお休みなさい、私が……」

それは根拠とか自信とかではなかった、
今まで天使様を感じることしかできなかった私だけど

「ティアさんの所に必ずお届けします！」
天使様の声を届けるのではなく、こちらから天使様へ思いを届けることはできないのか？

「私は聖女イレーヌです！」
私は嘘は言わない、思いの強さはあの王だって認めたくらいだ。
今までの行いとイレーヌの名にかけて全身全霊で祈りを捧げた。

※　※　※

白い、全てが白い場所だった。

「ティア」

目の前に向日葵の笑顔があった。

「お待ちしていました、カイムさん」
「ああ、ただいまだ。ティア」

こんなやりとりもきっともうできないのだろう、
だが、そう気がつくことができ、今まだ目の前にティアがいるそれだけで十分間に合った。

「いつだが『他の女と幸せになるなるのが許せない』って言ってたよな」
その答えを俺にさがして欲しいとも言っていた。
「はい、よく覚えていますね」
「まあな、どんな理由で説き伏せようと俺の都合でしかない
だから交換条件ってのはどうだ？」
「はい？」
「ああ、俺の最後の時間をティアにやる。
だから、現実での俺を我慢して見守っていてくれないか？」
「どういうことです？」
笑いながら問い返す。きっとティアにも先が見えたのだろう。
「いつか夢の中で俺を看取ると言ってただろ？
だからその少し前、最後に俺が見る夢をお前にやる
看取るついでだと思えばいい。
俺の最初と最後はおまえのものだ、どうだ？」
「都合のいい取引だと思います」
「言葉のわりに嬉しそうだが」
「はい、だって…」あなたが幸せでいられるなら、涙を浮かべて言外にそう言っていた。
「そうか」だから俺はあえて『すまない』とは言わなかった。
「じゃあ、交渉成立だな」

「はい、ずっとここで待ってます。
早く着たりしたら追い返しますからね！」

「善処はする、よしこれは前金だ」意識を集中する。
「……わあ」ティアは純白のウェディングドレスを身に纏っていた。

「気に入ったか？」
「はい」
そのまま口付けをかわす。これが、俺の見たほんの一握りの繋がらない夢の記憶。

だがこれは、いつか繋がる夢の記憶だ。

※　※　※

目を開くと、見知らぬ部屋の天井だった。

「よう、遅いお目覚めだな」
ジークがカウンターに座りグラスを傾けている。
どこか懐かしいあの酒場のようだった。

「ああ、聞かなくてもいいぞ、
ここは天国でもなければ、ヴィノレタでもない」

「おまえが天国に行けるたまかよ」

「なんだ、元気そうじゃないか」
俺の軽口に嬉しそうにこたえる。
「ここは牢獄だ。お前が倒れてから2、3日ってところだ」
「……そうか」
「オズに感謝しろよ、ずっとお前達の様子を見張ってたんだからな」
それで俺がここにいるわけだ。
「ほかのやつらは？」
「全員無事だ、昨日の会議は見物だったぜ」
「俺達を餌にしたんだ。それなりの成果はあったんだろうな？」
「ああ、まさかあんなに釣れるとは思わなかった、俺も正直慌てたぜ。
一部にしか王と聖女が大地に降りることは知らないからな、
命令系統を調べて貴族側と元反乱軍の物騒な連中は一網打尽だ。
王様に言わせりゃ『政事が3年進んだのと同じ』だそうだ」
「それくらい無いと、命をはった意味が無い」
「あら、それでも足りないくらいよ」奥からエリスが現れる。
「エリス……」大地で最後に交わしたやりとりを思い出した。
「これであなたも英雄様ね、あの娘達はみんな心配してたわ
どう？気に入った娘がいたら一緒になっちゃえば？」
「おれは……」
「『ティアのことを忘れて幸せになれない』でしょ。
聞き飽きたわそんなの、だから忘れられないようにしてあげる」
言ってエリスは外に出た。

「おいっ」慌ててそれを追う、外は既に日が落ちかけていた。
「あそこね、私が買った店なの。メルトの代わりができるとは思ってないけど
家で呑んだくれているよりは、手の届く所に居てくれた方がマシでしょ？」
「そこまでお節介にされる言われは無い」呟くエリスを追い越して前に立つ。
「俺は案外気に入ったけどな、リリウムにも近いし」
「ジーク、お前がそんなことを言ったって…な……」
入り口に立つジークを睨んだが、すぐに別の物が目に入った。
「苦労したのよ、看板を取り替えるのだって無料じゃないんだし
おかげでまた借金生活、私はオーナーで医者を続けながら稼がないと……
ちなみに雇われ店主はラヴィリアだから、ちゃんと来てあげなさいよ」
「あいつ酒呑めないぞ」ジークがポツリと呟く。
「うそ！？聞いてないわよ」
「本人が気がついてないだけだ、面白いから黙っていたが…」
「そういうことは先に言いなさいよ、ジーク！」
俺の呆けた顔を横目にエリスとジークは軽口を叩き合う。
そのほとんどが俺の耳には入らなかった。
看板の羽をあしらったそれと書かれた店の名前。
「ユースティア、いっつもティアって呼んでたけどあの娘に似合わない名前よね。

だから店の名前にしてあげたわ」

『これでもまだ、忘れられるのかしら？』

エリスは言外で語りながら値踏みするように俺をうかがう。

「は、はは……」笑うことしかできない。

「いい顔ね、借金したかいがあったわ。

ここにはあの娘を思ってたくさんの人がくるでしょうね。

そして毎晩笑って呑み交わすの。

あなたも、私の借金をはやく返せるようにしてくれると嬉しいかな」

今まで見たことのない優しい顔だった。

「ああ、仕方ないから付き合ってやるよ」

少し気恥ずかしくなり、乱暴に歩く。

これからどうなるかわからない。だが、大切な人を忘れる心配はしなくて済みそうだ。

「だからもう少しだけ、ここに居ていいかなティア……」

口の中で小さく呟く。

頬をそっと撫でる風が、ティアの返事であるかのように過ぎていった。

ノーブルホワイト（後書き）

とりあえず完結です。ここまで読んでくださった方ありがとうございます。
まとめるとなると大変でだいぶ時間はかかりました……。
データ上で完結にしていないのは、戻った後リシア達が何をしてのかというところを思いつけば書こうかなと、もっと時間がかかりそうですが…。
（なんだかんだでリシアも好きです、オーガストさんの書く王族はカッコイイです）

それが終わればいちよう完結です。
『小説家になろう』で他に書いている方々は、もっとたくさん書いて続けていらっしゃいますが、もともとこれは『どう終わらせるか』を考えて書いたものなので……。

多少自分語りをすると、オーガストさんのゲームを遊んだのは『夜明け前より瑠璃色な』が最初でした。それからここまでいちよう全部プレイはしています。
そのたびにいろんな話を想像していましたが、ちゃんと最後まで形にしたのは今回が初めてです。
（まあ一度くらいはやってみてもとか、ここでやらなければこんどのチャンスは何年後か！？みたいないろいろと個人的などうでもいい葛藤があったりしましたが……）

次に何が書くのか自体をまだ決めてません、この作品の別の視点（メルトさんを書きたい気もします…）とかまったく別の作品やジャンルに飛ぶかもしれませんが、
どこかで見かけたとき（何かあればここに載せる予定ですが）また

読んでいただければ幸いです。

幕間～スネークフット～

～Another view　ジークフリード・グラード～

部屋の窓から見る空は霞んでいた。

「ボス、灰皿かたす」

「おう」

紫煙の充満した部屋から見れば当然か、アイリスが吸殻満載の灰皿を取り替える。

さっそく新しく紙巻を取り出す。

「ボス、吸い過ぎ」

「これが吸わずにいられるか」

カイム達からの連絡は無い、既に予定から丸一日過ぎていた。

万が一を考えてオズ達を付けているが、そこからも報告は上がってこない。

アイリスに紙巻を取られたので、シガレットケースから葉巻を取り出す。

「ボス……」

「おまえはもう休め」

日はだいぶ高くなっている娼婦は寝る時間だ。

「でも……」
「お前がここに居ても、リシアは戻らんぞ」
「！？……そんなんじゃない」
クロから小耳に挟んでいたが、
こいつが国王のことを気にかけるとは世の中変わるものだ。

「わかった……」
「部屋でチェスをするのも禁止だ」
出かけのアイリスに付け加える。
最近暇さえあればクローディアに対戦をねだっている、さすがにそれはやりすぎだ。

「ボス……」
不機嫌な顔のアイリスの手には俺のシガレットケースが握られていた。

「こいつ、いつの間に……」
止める間も無くアイリスは階段を下りていった。

紫煙と共に溜め込んだ息を盛大に吐き出す。
ガキの悪戯ぐらいで腹を立てる気は無いが生憎これが最後の葉巻だ。

「まあ、最初の一口だけで後はおまけだけどな」
負け惜しみ染みた言葉を吐く時点で、少し弱気になっていると自覚できた。

「おまえは今どこに居るんだ、カイム」
ソファに深く腰掛け首を伸ばし窓を見上げる。

俺は俺の背負い込んだ物のために常に先を見てなければならない。

それを重く感じたことはあるが苦ではない。
だが、自分自身だけで身軽に飛び回るあいつを、たまに羨ましく思うことがある。

「隣の芝生は青いと、よく言うがね……」

その青さを眺めるだけでも十分お釣りがくる。
似て非なる者同士、お互いのもしもの人生を眺めることができるのだから。

「さっさと戻ってこいってんだ」
ろくに吹かすことなく葉巻を捻じ消した。

※　※　※

奴等が不在のまま、議会の召集があった。

「悪いなクロ」
ほとんどの人間が出払っている今、リリウムの人間を出すしかない。

「気にしておりませんよ、それより私がお供でよかったのですか？」
「腐蝕金鎖の連中だと人相が悪すぎて他の議員様方を怖がらせちまうんだ」
「まあ、それはそれは…」

これは冗談半分だが、もしものために
クローディアには今の議会の派閥を把握させていたのは事実だ。

リリウムの上客には今の議会の人間やそれに近い立場の人間が少なくない。
娼婦が仕事の合間に聞くそうした人間のこぼれ話を集めると、意外と見えることが多い。
これも娼婦達を管理するついでにクロにまとめてもらっていた。

上層に開場に到着した。
「仕事で、ご指名いただく方をお見かけしますね」
「変装はばれないと思うが、知らぬふりをしていろ」
「心得ております」

変装用の染料で髪を染めて、化粧で雰囲気を変えさせている。
ブラウスにロングスカートの今のクローディアは、どこからどう見ても貴族の秘書官だ。

「これは、これはジーク殿…」
元反乱軍の下級貴族がよってきた。

「今回、議会の召集。急すぎやしませんか？」
貴族流の挨拶は遠慮したかったので本題を切り出す。
いちよう言葉使いに相手を立てる雰囲気は出した、つもりだ。

「ええ、なんでも議会を揺るがす大きな事件があったとか…」
「はあ、事件ですか……」
知らないふりをするが、カイム達調査隊の以外ありえない。

「まだ情勢は安定していませんからね、
先走ってなにかよからぬことを考えたのでしょう」
「そうならないための議会であるはずですがね」
「いやまったく、お互い気をつけましょう」
それだけ言って貴族はそそくさと離れ、また別のグループの輪に入っていく。

「朝までうちの子で遊んでいた方です、召集を聞いて慌てて出てきたのでしょう」
クローディアが明後日を見ながら耳打ちする。

「何も知らないからとりあえず
鎌を掛けつつ情報集めってところか、精がでるこった」
それだけカイム達の動きは知られていないとわかる。
しかし、こうして集められるということは一部では情報は漏れているのだろう。

「結局、決定的な証拠も無しに出向くしかない、か……」
「私達がお役に立てず申し訳ありません」
「気にするな、いつもの仕事に加えた俺が無理を言ったんだ。
本来なら腐食金鎖の中だけでやるべき内容だ」
国王の提案に乗る形になった今回の案件。
ようは両勢力の強硬派の洗い出しとその丸め込みないし排除が目的だ。

政事が安定していないこの時期に、
邪魔になるものを力で押さえ込む類の物騒な連中は必ず動く。

先手を取られないために、自らを顧みない姿勢を見せる国王を、
同じ組織をまとめる立場として見れば、少し浅はかとも思える。

だが、その器に対してなんら実績の無い今は、
自ら先頭に立たつしかないという判断は嫌いではなかった。
俺も昔はそうであったと言えばそれまでだが、
その危険すぎる行いには、やはり頼りになる相棒がいる。

「カイム様達は必ず戻っていらっしゃいますよ」
「心配はしていない。
　期限を守れないようじゃプロの仕事としてはな……」
考えを見透かされたようで、反射的に長としての意見が口をついた。

※　　※　　※

開場は少し浮き足立った感じがした。
歩く端に、周りの断片的な会話が飛び込んでくるが、そこにあるのは状況に無知な自分に虚勢を張って、
なんとかこの場に溶け込もうという妙な連帯感。

「どうも気に入らないな」
「全ての方がジーク様と同じとはいきませんわ、
　皆様不安をなんとか隠そうとしているのでしょう」
それに何かを期待する空気がある。

「オズ達からの連絡は？」
言いながらそれとなく視線を泳がせる、無事であれば会場内に部下

が姿を現すはずだ。
「ありません、リサも見当たりません…」
別ルートでリリウムの人間も出しているがそちらもダメらしい。
「仕方ない」
始まる前に懸念を一つ消したかったが時間切れだ。
観念して自分の席に着く。
中央の演壇では開会の挨拶が始まっていた。
一通りの現状報告の後、貴族の1人が中央に進み出た。
「皆様にお伝えしたいことが御座います」
たっぷりと時間をかけて周囲を見渡すその貴族に嫌な予感がした。
「本日未明、私の元に大地で国王が亡くなったとの報が寄せられました」
周囲が一斉にざわめきだす。俺も自分を抑えるのに必死だった。
「詳細は不明ですが、既に調査隊を向かわせています
そしてこれには元反乱軍の一派が関与しているという情報を掴みました」
先ほどより一段と大きなざわめき、さらに『言い掛りだ』と野次が飛んだ。
「静粛に願います」
元反乱軍の下級貴族が席を立ち場を鎮める。
「本日我々も、ある筋の情報から我等が聖女がお亡くなりなられたと

聞き及んでおります、これは元王国軍によるものと話が出ておりますが
これについての返答をいただきたい」
言葉の終わらないうちに場は大混乱になった。
誰もが声を発するが、それは交じり合い意味をなさない騒音となった。

「どういうことだ？」
「わかりません、ただ双方とも明確な証拠を出していません」
顔を寄せて話すクローディア。

「わざとぼかしていると？」
「私にはそう見えます」
冷静な声に少し救われた気がした。
結局、混乱が収まらないまま、お互い証拠を出せの一点張りで会は一時中断となった。

廊下に吐き出された議員達はすぐさま数人のグループを作り、情報を集めている。
俺達は目立たないように柱の隅に陣取って様子を伺うことにした。

「どう思う？」
「ありえません」
主語は無い。いや、それを口にしたくないだけだ。

「くそ、何もわからん状況でどうしろってんだ」
基本的に会議中は建物から外出は禁止だ。

「ここは、カイム様達が生きていることを前提に考えるべきです」

「……まあ、そうだな。俺もどうかしていた」
場の空気に呑まれかかった自分を慌てて取り戻す。
無性にタバコを呑みたくなった。

「なら、国王と聖女が亡くなったと知らせるメリットはなんだ？」
「それもありますが、もともと政事を司っている方々が
今一番困っていることは何か、が大事と考えます」
「心当たりがあるようだな」

「はい、なんでも娼婦達の話では、議員様方は今回の騒ぎで
政事に介入してきた若い牢獄の指導者を煙たがっているとか……」

少し含み笑いをしてこちらを見る。

「なるほどね……」
それはまあ、半ば予想していたことではあった。
自分達の縄張りに我が物顔でしゃしゃり出てきたんだ、俺だったら
容赦しない。

「なら、この後奴等が何をするかは決まったな」
「勝算はあるのですか？」

「圧倒的に不利だ、なにせここは奴等が得意の戦場みたいなもんだ。
へたなことをして足元をすくわれるのはこっちだからな」

「では……」不安そうなクローディアを手で制す。
「流れに任せるしかないが大丈夫だ、ただ周囲には気を配れよ」
「畏まりました」
当然、身の危険も考えられたが今更隠れようもない。
クローディアには悪いがここは命を張ってもらおう。

「悪いな、身請けもままならないというのに……」
「お気になさらず、いずれカイム様から返していただきますわ」
どこまでが本気なのか、底の知れない女だ。

「ああ、奴が戻ったら好きにしていいぞ、なんなら身請けをねだってもいい」
「まあ、では是が非でもここを切り抜けなければなりませんね」
さすがに牢獄を生きた人間はしぶとさが違う。
普段よりもいっそう愉快そうに笑うクローディアを見てそう思った。

※　※　※

青年仕官の呼び声で再び場内に集まる議員達。

そして演壇に俺が呼ばれ、流れは廊下で話したことを裏付ける形になった。
なんでも俺は『王と聖女に大地への案内を手引きし、その場での暗殺を謀った』らしい。

人をまとめるための安易な手段として、
それぞれに理がある共通の敵を設定する方法がある。
俺が反乱軍を組織し、牢獄の不満の流れをまとめた方法もそれだ。
安易な手段と言ったが、それは単純であるためわかりやすく効果は絶大だ。

たぶん、今ままで争いの中で散々使われ、これからも用いられることだろう。

今回は両勢力の強行派を一つにまとまるための敵役に、俺が抜擢されたわけだ。
ご丁寧にどこからか国王と交わした手紙が数枚、証拠として提出された。
これは『一部の者でしか国王が大地へ降りたことを知りえない』確かな証拠として、
俺が強行派を攻める材料にする予定だったものだ。
まさかでっち上げの陰謀に利用されるとは……。

「俺もやきがまわったのかもな……」

さきほどから貴族の追求が続く。とにかくここは事実は事実として認め、
あとは『知らない』の一点張りで時間を稼ぐしかない。
1人演壇に立たされたのではクローディアの助言も無い。
ここは、他の議員に少しでも疑いを広げないようにするしかないだろう。

「ジーク殿、重ねて尋ねるが王が大地の視察を願ったとき、
　その危険性を十分お話になられたのか？」
ボロを出さない俺に対して顔を真っ赤にしながら、物凄い剣幕でこちらを睨む貴族
まあ、毛ほども恐怖は感じないが……、
これならメルトやエリスの冷ややかな皮肉の方が万倍もましだ。

「もちろんお話した。だが、国王の国を思う熱意にほだされて
　少数の護衛をつけ、お送りしたまでです」

我ながらよく回る舌だと思いながら、
ニュアンスは多少違うが数回目の答えを述べる。

「なぜ、議会を通して行わなかったのですか？」
「国王のたって願いで、他言無用とのことでした。
何か含むものがあったのでしょうが、私には解りかねます」
『何か含むものが』の所で一瞬貴族を睨んでやった、
ビビッていたところを見ると、小者なのだろうがそれでもすぐに体裁は繕っている。
貴族はお付きの青年仕官に水を持ってこさせ、
一気に飲み干すと乱暴に青年仕官の持つ盆に帰した。

なんとか持ち直した貴族は咳払いをしてから、さらに続けた。
「あなたはそこで、反乱軍当時の野心から国王を打ち
貴族側を一気に駆逐しようと考えたのではありませんか？」
「私は牢獄……『特別被災地区』の安全を第一に考え反乱を起こしたのであり
国を取ろうと考えたわけではありません」

「最初はそうであっても野心なぞどこからでも芽生えるもの、
欲が出ないとはいいきれないではないですか？」
そっくりその言葉を返してやろうかと思ったが、ぐっとこらえる。

「私は身の丈にあった場所に自分を置いています。
それ以上は手に余るものだと思っています」
ほんの少し皮肉を込めて言ってやった。

「なるほど。では時を同じくして
聖女様も大地へお降りになられた件に関してはいかがか？」
埒が開かないと悟ったのか、同じ反乱軍だった下級貴族が前に立っ

た。

「それに関しては希望は聞いておりましたが、正式に話はありませんでした」
これは嘘だ、相談されていたし正式な依頼として俺に話もあった。
ただ2人の依頼に同時に関わることは、後になって怪しまれるのと判断して
個人の意思で降りてもらったのだ、まあカイム達に合流するように仕向けたのは俺だが…。

「国王の願いは聞いても聖女の話しは聞けぬとは、どういういうことか？」
先ほどの貴族と違って理詰めで責めてくるつもりのようだ。
既にいくつかの返答はできないようにされていて、慎重に言葉を選ぶ必要がある。

「権限を剥奪されたても国王は国の象徴、仮にそこに聖女様が同行されるとなると
教会と国王の関係にあらぬ噂が立つと思い、保留させていただいたまでのことです」
これで元反乱軍と教会もあくまで独立した立場であると言い張ったも同じだ。
まあ、ここにいる人間は誰も信じちゃいないだろうが。

「しかし聖女様は大地に降り亡くなられた。
ジーク殿はこうなることがわかっていたのではあるまいか？
元反乱軍勢力に加わらず、教会を興された聖女様が、今後妨げになると考えたのでは？」
だからそれはお前等の考えだろうに…。

「先ほども申し上げたとおり、私は自分の守る人間のために
この立場に収まっているだけのことです」
そろそろこの問答にうんざりし始めていた。

それは目の前の下級貴族も、たぶんこの場に居るほぼ全員が同じだったただろう。
「このままでは状況証拠でどのみちあなたは終わりです。
一部でも認めるのであれば2年で今の地位に戻して差し上げましょう」
だから、その下級貴族のささやきで流れを変える決心をした。

「国というものは、普段意識はしない空気程度のものだが、
それでも守り囲われているもだ」
誰に言うでもなく語りだした俺を訝しむ視線が集まる。

「当然、俺や俺の組織もその枠内にいるが、
こうも空気が淀んでいるようじゃ胸糞わるいんでな」
話の勢いに任せて目の前の演壇を蹴り倒す。
派手な音をたてるそれと、俺の語気押されて貴族達は後退った。

「こんな国に収まるのはこちらから願い下げた！」
場内は静まり、俺の啖呵に貴族達がどう反応するのか視線が集まった。

「貴様！国家に対する侮辱もはなはだしい、構わん誰かこの男を捕らえろ！」
兵士が数人かけつけ俺を取り囲む。
「反乱を起こし国家にあだなす輩だ、さっさと捕らえぬか！」
躊躇する兵士を叱咤する貴族、それでも睨む俺に歩み寄ることができず及び腰だ。

そんな拮抗状態に上から声がかかった。
「事実を突かれ癇癪を起こすようでは、子供とかわらんな」
見ると2階からこちらを見下ろす人影。
「己が暗愚な行為がこのような事態を招いたことを省みぬか！」
小柄なシルエットに重厚なマントを翻して痛烈な声をあげる。
「何故……国王だと？ええい、偽者だ！殺せ！殺せ！」
慌てて兵士は2階に向かう。
混乱の中、俺はクローディアを探した。
多少困惑した顔だが、俺と視線が合うと静かに頷いた。
どうやら俺の考えを汲んで肯定してくれたらしい。
ならば、次に起こることは……俺は全力で人を掻き分けて兵士達を追った。

※　※　※

～Another view　アイリス～

私の言葉で眼下の光景は一変した。
すぐに離れないといけないけど、まだ少し時間はある。
きっとこの中にもあの執政候と肩を並べていた者もいるだろう。
そんな人間達が私を一斉に見据え、驚愕し、声を上げて取り押さえようとする。

『おまえを踏みにじった人間を、今一度見下ろす気はないか？』
数刻前に戻ったリシアが私に発した言葉。
ただ驚きと冗談半分で引き受けてはみたものの…。

「醜い……」

自分の予想外の事態に、
人間はこうも恥ずかしげもなく身を晒すのかと嘆息した。

それは、謂われない罪で捕らえられた両親の姿をも思い出させ、更に気を重くさせる。
それを綺麗な記憶として生きていく糧にするほど緩い頭ではなかったが、
それでも不快感を覚えるということは、私もまだ親の子なのだろう。

リシアは私に何を見せたかったのか？
彼女と私にそう差異が無いと言いたいのか、
いや、今更それで同情を引こうと考える人間でないことは理解している。

「アイリス、ほら、早く戻るよ」
「……ん」

リサが辺りを不安そうに見渡す。足音はだいぶ近くまできていた。
「さあ、逃げるよアイリス、なんだかワクワクするね」
「不謹慎……捕まったら大変だぞ」
「わかってるけどさ、なんか楽しいじゃんこういうの」
「……ふん」
そうやって笑うリサとリシアの顔がだぶった。
彼女もただ、私に面白がって欲しかっただけなのかもしれない。
こんな所に出向かせてとんでもなくくだらない理由だと思うが、
それはどんな理由よりも純粋に思えた。

「……リサ」
「どうしたのアイリス？」

「……ここも、変わらない天井だな」
振り返り見上げる、豪華な装飾や美麗な細工がなされたそれは、
リリウムのタバコの紫煙で変色した木目とそう変わらなかった。

※　※　※

～Another view　ジークフリード・グラード～

アイリスは無事逃げおおせたらしい。
慌しく行きかう兵士の様子を見ると完全に姿をくらましたようだ。
「1人ではない仲間もいるはずだ、必ず捜しだせ！」
「ジーク殿！あなたの差し金が！」
「さあ、私であればもっとうまく使ってみせますが？」
「ふん、小細工を……
捕まえれば全てわかること、何をしている会場は完全に封鎖しているはずだぞ！」
貴族連中は再び顔を沸騰させて捜索にあたっている。
気を利かせたのか手拭や水をもってきた青年仕官は、哀れにも跳飛ばされていた。
「怪しい小娘を捕まえました！」
ほどなく兵士2人がうな垂れた娘を突き出してくる。
「よし、こっちに連れて来い！」
憔悴しているのか顔を上げないその娘に貴族は容赦無く言葉をぶつけた。
「娘、国王をどこにやった！隠し立てするとためにならんぞ！」
「……」
「答えよ！国王は何処か！」
反応を示さない娘の髪を掴み顔を強引に上げさせた。
「既に死したる国王に、いまさら何を怯えるか？」
「……？」

顔を上げさせられた娘はいきなり大仰な言葉をのべた。
「余の顔を見忘れたか？」
「……こ、国王」
それはまさしくリシアだった。
「捜していたのだろう？私はここに居る、なんなりと申してみよ」
「……く、あ……」
あたりが騒然となるなか貴族は口をパクパクとして言葉をなさない。
「誰か、少し落ち着かせてやれ」
さきほどの青年仕官が進み出る、ビンに並々と満たされた水はそのまま貴族に浴びせられた。
「何をする！無礼ではないか！」
国王の出現に気圧された貴族が再び語気を荒くした。
「無礼とは、誰に口を聞いているのか！」
青年仕官はよく通る声でそう告げると着衣を貴族にぶつけた。
視界を奪われもがく貴族が再び目を向けたとき、そこには白い服に身を包んだ聖女が居た。
「な……馬鹿な…」
目の前で展開されている急激な展開に俺もついてくのがやっとだった。
「私を亡きものとしようとは無駄なこと、
天使様のお導きがあれば何度でも復活しましょう」
「まあ、私はそのついでみたいなものだ」

厳かに告げる聖女の後に国王が呑気に付け足す。

「さて、ここは会議中は完全に封鎖されているのだろう
最初から全て聞かせてもらったぞ。
それと、こちらも幾つか尋ねたいことがあってな」
余裕たっぷりで語るリシアの脇から、縄で縛られた薄汚い男を放り出された。

「おまえから私達の暗殺を依頼されたと、この男が自白したがいかがかな？」
崩れ落ちる貴族を合図に数人が出口に走った。

「フィオネ！」
「御意のままに！」
どこからか人垣をすり抜けて、女剣士は走り出した他の貴族を捕らえる。

「長き間の会議ご苦労！だが、今しばらく貴殿らの時間を頂きたい。
我と聖女の名において断罪せねばならぬ者がおる、

今回の騒ぎの証人にとして、各々方には今一度席に戻り、
ことの顛末を見届けていただく」
無言の肯定の中、演壇に向かうリシア。

「なに、日が沈むまでには方を付けよう。
それに気持ちよく晩餐を迎えられることは保障する」
振り返り笑うリシアに王の風格が漂っていた。

※　※　※

「で、あなたは結局何もしてないわけよね？」
カウンター越しに火酒を注ぐエリスは新鮮ではあったが様になっていた。

「俺だって最善は尽くしたさ、
ただお前達が戻らなければどうしよもなかっただけだ」
グラスを受け取り一気に飲み干す。
やっぱり役立たずじゃないと呟くエリス無視して店内を見渡した。

ここはリリウムの近くの元酒場、いつのまにかエリスが買い上げたそうだ。

今朝に戻ったそうだが、カイムは意識不明のまま。
全員がボロボロ、大きな怪我をしていないのが幸いだったが、
緊急に議会が開かれることを聞き、急いで場を納める策を練ったのだという。

「あの王の考えることは品がありません」
少し離れたテーブルで聖女とラヴィリアが簡単な食事をしていた。

「まあまあ、時間はありませんでしたが一度に解決してよかったです」
「私はあの貴族に何度も酷い扱いをうけたのです、
もっとよく考えてから行動に移すべきでしたわ」
ラヴィリアに聖女が噛み付く、よほどあの場でのことが屈辱らしい。

「それにしては見事な水の浴びせっぷりでございました」
隣に座るクローディアがコロコロと笑った。

「あれぐらい当然です」
言ってはいるものの恥ずかしいのか、そのまま黙って食事に戻る。

「そういえば、そのリシアはどうした？」
「奥の部屋を貸してくれってこもったきりよ」
エリスが面倒そうに応える。

「あれか？」
「あれでしょう、アイリスも見当たりませんし」
出かけのチェスを再開しているのだろう。
アイリスにしては妙にこだわったもんだ。

「しかしこれだけ騒いでいるのになぁ…」
離れた長椅子に寝かされているカイムを見る。

「外傷は無いわ、呼吸も安定しているし時期に目が覚めるでしょ」
相変わらず素っ気無いが、しっかり仕事はしていたようだ。

「しかし、とうとう奴自身が光っちまうとわね……」
調査隊の簡単な報告は聞いたが、驚きを通り越して呆れてしまった。

「で、大丈夫なのか？」
「何が？」
「いや、まだ天使様のことを引きずってるんだろ」
空気が少し重くなる、
どうせならそちらも適当に解決してくれればよかったのだが…。

「それは私の専門外よ」
「そうかい」
だったら、なぜわざわざこの店の名前をあれにしたのかね。
まあ、エリスなりの考えがあるんだろうが……。

「いやあ、負けた負けた」
「なんで、負けた奴の方が嬉しがる……」
沈黙を破って奥からリシアとアイリスが現れた。
よくわからんが、お互い花輪を被っている。

「なんの罰ゲームだそれは？」

「気にするな、再戦の証だ」
「だから、なんで嬉しそうにする……」
食ってかかるアイリスをリシアは軽くいなしていた。

「なんだ、まだカイムは目覚めないのか」
「目覚めのキスでもしてみれば、居眠りの王子様は案外起きるかも……」

「なら、遠慮なく」
「いや、少しくらい恥じらいをもてよ」
近づこうとするリシアを咎める。

「別に減るものではなかろう？」
「どうしてあなたはそう品が無いのですか」
再び聖女がくってかかった。

「女の戦いに品も何も無い」
「そこで開き直らないでください」

「あら、そう言えば、あそこから助かったら、
カイム様を好きにしてよいというお話のはずですねジーク様？」
「ああ、そんなことも言ったか？」
火に油を注ぐなよクローディア……。

「へえ、やるじゃない」
「ええ、私をお求めになることはありましたが
良い機会なのでここははっきりさせておきませんと…」
聖女の反応が面白かったのか、クローディアはなおも挑発するような言葉を選んだ。

「な、な、な、お求めになった……と、カイムさんが……
あなた何様のつもりですか！」
既に聖女様は見境が無くなっているようだ。

「見ての通りの娼婦。哀れな夜鷹にございます」
言葉とは裏腹の上品な仕草に、聖女は毒気を抜かれてしまった。

「まあ、それが仕事なのだからな仕方あるま……ん？
アイリス、もしかしてお主も……」
なだめようとしたリシアが、何か思いついてアイリスに視線を向ける。

「……ある」
意外にも頬を赤らめながら小さく応えた。

「そ、そうか、まあ仕事だものな……」
さすがのリシアも少し戸惑っているようだ。

「禁止です、絶対に禁止です！教会は娼婦を仕事して認めません！」
「ほう、それは俺の抵抗勢力になるという意思表明か？」
もちろん冗談だが少し脅してやった。

「臨むところです！ラヴィ戻って対策を練りますわよ」
「あ、ま、まってコレット、夜から私ここで働くから……」
大股で店を出る聖女をあわてて追うラヴィリア。
エリスは『日が暮れた頃には戻ってきてね～』と適当に返していた。

「本気かな…」
「あやつならやりかねん……」
俺とリシアで出口を見守る。

「少々やりすぎてしまいましたね」
「いいのよ、静かになったし」
言いながらクローディアも席を立った。

「そろそろ店に戻ります。
エリスさん、贔屓にさせていただいてよろしいですか？」
「どうぞご自由に、この店はあの子の世話になった人を拒む理由はないわ」
少し意外そうな顔をした後、クローディアは余韻を残すことなく店を出た。

「では、私も一度城に戻るとするかの
フィオネに事後処理を任せっきりだったからな」
「騒がしいから、そのまま城に引き篭もってなさいよ」

「あくまで象徴だからな、そこは好きにさせてもらう……
ああ、それとなジーク」

「何だ？」

「おまえの議会での発言、なかなか身につまされるものがあった。
今後、国が傾くようなことが起こるやも知れぬが……」
「人が集まってできたものだ、作ったものであれば壊れることもあるだろ」

「ああ、だが国という基盤はそうであってはならない。
私という象徴が権力から外されたのはよい機会だったとも思う」
「何が言いたいんだ？」

「おまえの好きにやればよいということだ、国の体裁は我が責任を持つ。
だから入れ物の中身は思うまま混ぜっ返すがいい」
「気に入らなければまた反乱を起こせとでもいうのか？」

「誤解を恐れずに言えばそうだ。足並みをそろえただけでは強い国には育たない。
時には強靭な力をもった指導者が必要だ」
いつになく真剣な言葉が続いた。

「ただ改革をする人間に、
国のあり方をも背負わせるのは酷というものだろう
絵物語で読む国はそうして生まれは滅びの繰り返しだ。

歴史を途絶えさせてはならんのだ。
ノーヴァス王家が続いたのも物理的に閉鎖されていたにすぎん、
これから少なくとも3代は安定した政治を維持せねばならん」

「何だよ3代って」

「単なる直感だ。直接語り聞かせることができるのは
そこまでが限界ということだ。
その先も安定させるには、
国の歴史を重んじつつもその時代にあった政治を行わなければならん
お主の働きに期待している」
それだけ言って席を立った。
「ああ、そうだエリスよ」
「なに？」
「カイムのこと、くれぐれも頼むぞ」
「ふん……言われなくても」
少しだけ笑ってエリスは応えた。
結局、長く顔をつき合わせていた3人が残った。
「もう一杯たのむ」
「残念、さっきので最後よ。
そうだ、戻ってきてまだ看板を作ってなかったわ、やってくれない？」
「これからか？明日にしようぜ俺もくたくただ」
「何よ、カイムが起きたら驚かせるって話に乗ってたじゃない」
「じゃあ酒を用意しとけよ、腐食金鎖の頭をあごで使うっていうんだからな」
「はいはい、わかりました」

「ほんとに何時まで寝ているのかしら」
「さっきのを試してみればいいじゃねえか」
最初からこいつと一緒になってくれていれば、俺の苦労の半分は減っていただろう。

「それもそうね」
エリスはごく自然な動作でカイムに口付けをした。
それと同時にカイムが何か寝言を言ったようだったが。

「ほんと妬けちゃうわ」
聞いたであろう本人は何も語らなかった。
俺は残ったグラスをゆっくりと傾けた。

幕間～スネークフット～（後書き）

間があきましたが、これでちゃんと完結です。
今回は、硬いセリフや展開が続いたので考えるのが大変でした。
能力以上のことはするものではないです……。

リシアが出たときのセリフは、まんま某〇れん坊将軍です、
最後は決まっていたので勧善懲悪といえば展開はやはり時代劇でしょう、
まあ趣味ですが…。

あと、サブタイトルでだいたいヒロインを連想させるネーミングをしてましたが
フィオネだけちゃんと考えてませんでした。
（オールラウンドに活躍できる分、ここぞという見せ場がつくれませんでした…）
とりあえずノーブルホワイト（実は某ゲームのウェディングドレスのアイテムの名前もちろんこの話でのラストの夢のシーンをイメージして付けました）が、イメージ的にフィオネっぽく捉えられなくもない……かなと。

いちよう他に何か乗せる準備もしています……。
とにかく、読みづらい文をここまで読んでいただきありがとうございました。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n1602t/

穢翼のユースティア　アンチェインドリームス

2011年6月21日12時01分発行